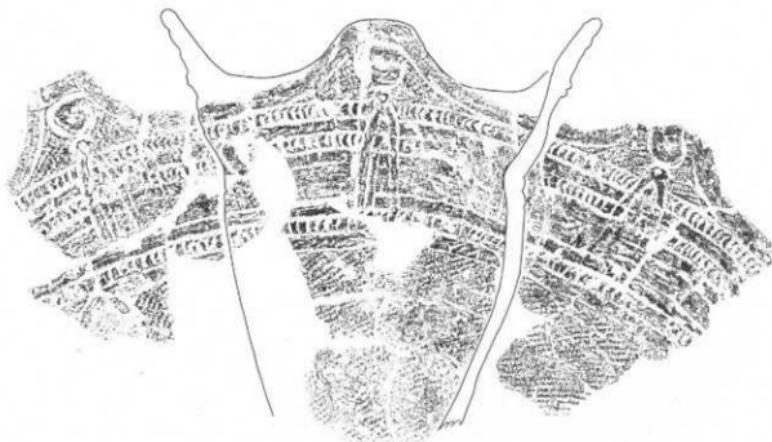


北野丸山遺跡

—県営圃場整備事業（桐島桐原地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2003

新潟県和島村教育委員会

北野丸山遺跡

—県営圃場整備事業（桐島桐原地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2003

新潟県和島村教育委員会

序

和島村は、新潟県中央部のやや海岸よりに位置し、水田耕作に適した立地条件のためか、稲作を生業の主体とする弥生時代以降の遺跡が、多く分布しております。特に古代においては、古志郡の中核部として栄え、郡衙関連遺跡である『下ノ西遺跡』や、『沼垂城』「郡司符」と書かれた木簡の出土で全国的に注目を集めた国史跡『八幡林官衙遺跡』など、重要な遺跡が次々に調査され、律令制下の地方支配を考える上で重要な資料蓄積がなされております。

このような弥生時代以降の繁栄とは対照的に、縄文時代の遺跡は非常に少なく、信濃川流域でみられるような大規模集落は今のところ未確認です。数少ない縄文遺跡のうち小島谷『十二遺跡』は、戦後まもなく発見された村内では著名な遺跡のひとつです。同遺跡は、昭和22年には島田中学校郷土部（寺村光晴氏指導）による試掘調査で多量の土器が出土し、その時の資料は寺村氏によって『越佐研究』誌上で報告され、県内の研究者の注目を集めました。このほかの縄文時代遺跡としては、組合せ式斧柄が完全セットで発見された島崎『大武遺跡』（平成6～9年、県埋文事業団本発掘調査）や、日野浦『高船場遺跡』、若野浦『一本松遺跡』などが知られています。

今回報告する『北野丸山遺跡』は、平成12年度の試掘で確認された新発見遺跡であります。翌13年度の本調査では、当初予想に反して縄文時代の遺物が多量に出土し、本地域では稀な中期前葉から中葉段階の土器様相を解き明かす、貴重な調査例となりました。本遺跡は、丘陵部に近いとはいえ全くの沖積地に立地しています。このような低平な土地に、縄文人の生活痕跡が埋もれていたことには、非常に驚かされました。

これらの調査成果をまとめた本書が広く活用され、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められることを願っております。

なお、この度の発掘調査にあたりまして、県文化行政課からは適切な指導をいただき、県長岡農地事務所、三島郡北部土地改良区、村地域開発課をはじめ関係機関各位、地元の皆様方には多くのご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

和島村教育委員会

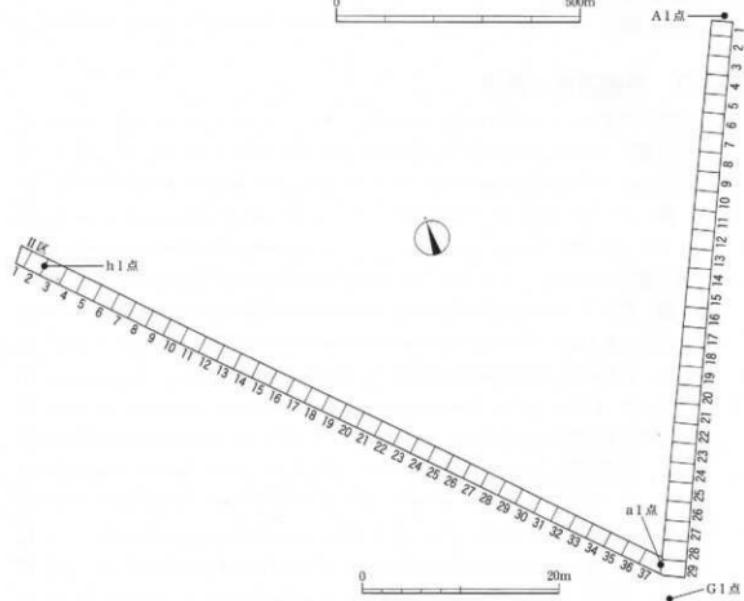
教育長 下村 孝一

例　言

1. 本書は、新潟県三島郡和島村大字北野に所在する、北野丸山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、県営圃場整備事業（桐島桐原地区）に伴い、和島村が新潟県から受託して実施した。
3. 調査に要した経費は、確認調査については文化財保護担当部局が負担し、本発掘調査については事業主体である新潟県（長岡農地事務所）が90%、文化財保護担当部局が10%を負担した。確認調査および本発掘調査に伴う文化財保護担当部局分については、国庫および県費の補助金交付を受けた。
4. 遺構番号については、通し番号とした。
5. 出土遺物の注記は、「北丸」とし、ほかにグリッド名・層位・遺構名等を記した。
6. グリッド杭の打設は、国土調査公共系座標を基準とし、㈱イビソクに委託して実施した。また、完掘後の遺構平面図については、直営で平板測量を行い1/40スケールで作成した。
7. 整理作業は、調査員を中心に下記のメンバーの協力を得た。
小田富美子・久住幸江・近藤保・関川たづ子・高橋智子・早川雅子・山口八千代（五十音順）
8. 本書の執筆は、調査担当が行った。
9. 調査・整理体制は、以下の通りである。

調査主体	和島村教育委員会	教育長	下村孝一
調査担当	〃	主任	田中 靖
調査員	〃	主事	丸山一昭
事務局	〃	事務局長	古室 栄
〃	〃	係長	大矢征司（平成13年度）
〃	〃	係長	山口正則（平成14年度）

10. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏・機関から多大なご教示とご協力を賜った。ここに厚く御礼を申し上げる。
金子拓男・北村亮・國島聰・坂井秀弥・澤田敦・鈴木俊成・関雅之・高橋保・高浜信行
寺崎裕助・田海義正・戸根与八郎・藤巻正信（五十音順）
新潟県教育庁文化行政課・新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県長岡農地事務所・三島郡北部土地改良区
11. 【各地区的呼称とトレーニング区画の設定】
桐原排水処理場西辺に沿う調査区をI区、荒巻川に並行する調査区をII区と呼称した。調査区の形状から、統一したグリッドの設定は行なわず、I区は任意の2点（座標値：A1点 X=174728.817 Y=25194.923、G1点 X=174673.017 Y=25172.869）を基準とし、長大なトレーニングを2m間隔で区画を設定した。II区も同様に、a1点（X=174676.649 Y=25172.956）、h1点（X=174723.974 Y=25121.377）を基準に2mを単位とする区画を設定した。各調査区画の呼称については、I区は北よりI-1～I-29まで、II区は西よりII-1～II-37というように、地区名と数字を組合せて表現した（第1図）。



第1図 グリッド設定図

目 次

序
例 言
目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査および整理作業の経過	1
(1) 確認調査	1
(2) 本調査	2
(3) 整理作業	2

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3

第Ⅲ章 発掘調査の概要

1. 遺跡の概要	6
2. 基本層序	6
3. 遺構各説	8
(1) 溝	8
(2) 土坑・その他	9
4. 出土遺物	10
(1) 概 観	10
(2) I区出土土器	10
a. 弥生時代	10
b. 古 代	11
(3) II区出土土器	11
a. 古墳時代	11
b. 古 代	12
(4) 繩文時代の遺物	12
a. 土 器	12
b. 土製品	14
c. 石 器	14

第IV章　まとめ

1. 遺構について	16
2. 遺物について	16
引用・参考文献	17

挿図目次

第1図 グリッド設定図	例言
第2図 周辺の主要遺跡（縄文時代）分布図	5
第3図 北野丸山遺跡基本層序柱状模式図	7

表 目 次

第1表 整理作業工程表	2
第2表 周辺の主要遺跡（縄文時代）一覧表	4
第3表 遺物観察表	19

図版目次

（図面図版）

図版1 I区遺構平・断面図	図版10 II区出土縄文土器（中期前葉5）
図版2 I区・II区遺構平・断面図	図版11 II区出土縄文土器（中期中葉）
図版3 II区遺構平・断面図	図版12 II区出土縄文土器（中期前葉～中葉）
図版4 I区出土土器（弥生時代・古代）	図版13 II区出土縄文土器・土製品（中期前葉～中葉）
図版5 II区出土土器（古墳時代・古代）	
図版6 II区出土縄文土器（中期前葉1）	
図版7 II区出土縄文土器（中期前葉2）	
図版8 II区出土縄文土器（中期前葉3）	
図版9 II区出土縄文土器（中期前葉4）	

(写真図版)

- 図版14 北野丸山遺跡遠景（東→西）、北野丸山遺跡完掘状況空中写真
- 図版15 I区調査状況、調査前の状況（西→東）・I区完掘状況（南→北）・SD37 SD38（南→北）・SD39（南→北）・SD34 SD35（北→南）・SX36 SD40（南→北）・SD41（南→北）・SD42（南→北）
- 図版16 II区調査状況(1)、調査風景・II区完掘状況（東→西）・SD02（東→西）・SD05 SD07（西→東）・SK06（東→西）・SD01土層断面（南→北）・SD01遺物出土状況（南→北）・SD01完掘状況（東→西）
- 図版17 II区調査状況(2)、SD26土層断面（東→西）・SD26完掘状況（東→西）・SK29土層断面（南→北）・SK29完掘状況（南→北）・縄文時代捨場土層断面（南→北）・遺物出土状況（縄文土器・砥石）・遺物出土状況（縄文土器）・遺物出土状況（石器）
- 図版18 I区出土土器（弥生時代・古代）
- 図版19 II区出土土器（古墳時代・古代）
- 図版20 II区出土縄文土器（中期前葉1）
- 図版21 II区出土縄文土器（中期前葉2）
- 図版22 II区出土縄文土器（中期前葉3）
- 図版23 II区出土縄文土器（中期前葉4）
- 図版24 II区出土縄文土器（中期前葉5）
- 図版25 II区出土縄文土器（中期中葉）
- 図版26 II区出土縄文土器（中期前葉～中葉）
- 図版27 II区出土縄文土器・土製品（中期前葉～中葉）
- 図版28 I・II区出土縄文時代の石器（中期前葉～中葉1）
- 図版29 I・II区出土縄文時代の石器（中期前葉～中葉2）

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

県営圃場整備事業（桐島桐原地区）は、平成5年度から実施されており、事業開始以来和島村教育委員会では、上桐『門新遺跡』（平成6年度）、上桐『門新遺跡外割田地区』（平成7年度）、上桐『上新田遺跡』（平成7～8年度）、三瀬ヶ谷『松ノ脇遺跡』（平成9年度）、小島谷『下ノ西遺跡』（平成11～12年度）、島崎『奈良崎遺跡』（平成12年度）の6遺跡に対し、事前の発掘調査を行なっている。既調査では、「延長六年十月十二日」の紀年銘を持つ漆紙文書を伴う開発領主の居宅が検出された門新遺跡や、天王山式系土器の良好な一括資料が出土した松ノ脇遺跡、7～10世紀の古志郡衙および大家駅が複合した官衙群と推定される下ノ西遺跡における調査成果が特筆される。

今回報告する北野丸山遺跡は、和島村大字北野字上田に所在する。本遺跡は、北野住宅団地建設に伴う試掘調査（平成9年3月）に並行して実施した、分布調査により発見されたものである。遺跡内から採集された遺物は、古代の土師器と須恵器が主体であり、縄文土器と思われる磨耗した厚手の土器片も少量含まれていた。この時点では古代中心の遺跡と考え、縄文土器については東側に近接する独立丘陵（丸山）からの流れ込みと理解したのであった。

平成12年10月、北野丸山遺跡周辺の県営圃場整備事業が、平成13年度の通年施工で実施される見通しとなり、長岡農地事務所の担当者と遺跡の取り扱いについて協議を行なった。その結果、①平成12年度中に確認調査を実施して遺跡範囲・埋没深度を確定すること。②埋没深度が判明した段階で田面高の計画値を再考し、本調査範囲をできるだけ減らすこと。③本調査は平成13年度早々に実施し、お盆頃までには完了させること。の3点で合意した。

2. 発掘調査および整理作業の経過

（1）確認調査

平成12年12月22日、桐原集落排水場の西辺に沿う位置（本調査時のI区）に、2m×2mの試掘区を2ヶ所設定して調査を行なった。北側の試掘坑からは、土師器・須恵器の小片がごく微量出土しただけで遺構も検出されず、遺跡の縁辺部に近いことが明らかになった。南側の試掘坑では、ピット・砂を覆土とする溝状の落ち込みが検出され、その中から磨耗した縄文土器が、比較的まとまって出土した。

平成13年3月28日、荒巻川に沿って設置される排水路の敷地予定地（本調査時のII区）に2m×2mの試掘区を6ヶ所設定して調査を行なった。その結果、一段低い水田に設定した西側の2ヵ所では遺構・遺物は検出されず、桐原集落排水場寄りの4ヶ所から古墳時代の土師器・平安時代の須恵器とともにピット・溝などの遺構が検出された。

以上の2日間にわたる確認調査の結果、排水路が建設される部分のうち総延長130mが本調査の対象範囲となることが判明した。

(2) 本調査

平成13年5月28日、長岡農地事務所および三島郡北部土地改良区の担当者と、現地にて打ち合わせ。

6月5日、作業員休憩用のユニットハウスと仮設トイレの設置。発掘区周辺の除草作業。

6月6日、発掘器材・資材の搬入。

6月11日～6月13日、バックホーによる表土剥ぎ作業。

6月18日、㈱イビソクによる基準杭設置。同日、それに基づいたトレントの区割りを設定。

6月19日～7月9日、I・II区の包含層掘削と遺構確認。I区においては磨耗した縄文土器（I-25～29区に集中）と、7～9世紀頃の須恵器・土師器が出土。II区では縄文時代の土偶（II-36区）1点と、古墳時代前期から平安時代にかけての須恵器・土師器が検出された。遺構の状況は、I区では北半に砂を覆土とする溝（自然流路？）などが希薄に分布し、それとは対照的にII区では、多くの溝・土坑・ピットが検出された。ピットの中には柱穴と推定されるものも存在する。

7月10日～7月23日、遺構掘削作業。I区南端からII区東端にかけてのびる流路を調査したところ、その基底部付近で縄文土器を含む暗灰褐色土が確認され、現在の遺構確認面である黄褐色土の下層に縄文時代の包含層が存在することが明らかになった。縄文時代の包含層は、I区では南から北へ、II区では東から北へ急激に落ち込んでおり、上層遺構を記録した後に杭・コンパネ等で壁面を補強しながら下層を掘り進めたが、順次深度が深くなり危険なため、調査できたのはI区で南北6m、II区では東西5mの区間にすぎなかつた。最も深くまで調査したII-35付近での深度は、現田面から-1.9mに達した。縄文の包含層からの出土遺物は、II-35～37区のものがほとんどで、縄文時代中期前葉～中葉に位置付けられる多量の土器・土製耳飾・三角形土版・石鏃・打製石斧・磨製石斧・凹石などが検出された。

7月24日～7月25日、平板に遺構平面図作成およびレベリング作業。

7月26日、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影（㈱イビソクに委託）。

8月6日、各種器材の撤収を行い、本日をもって実質的な現場作業は終了となった。

(3) 整理作業

北野丸山遺跡の整理（報告書作成）作業については、下表の通りである。

作業内容	平成13年			平成14年										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
遺物注記・復元														
遺物実測・トレース														
遺物写真撮影														
遺構写真整理														
遺構図面整理														
遺構トレース														
図版作成														
原稿執筆														
校正														

第1表 整理作業工程表

第II章 遺跡周辺の環境

1. 地理的環境

北野丸山遺跡は、新潟県三島郡和島村大字北野字上田に所在している。和島村は、新潟県のほぼ中央部、中越地方の海岸寄りに位置しており、地形的には、三島山地から派生する『東側丘陵』・海岸に面した『西側丘陵』・両者に挟まれた鳥崎川沿いの沖積低地、の三種類に分類されている（藤田・長谷川1996）。

今回調査された北野丸山遺跡は、地形区分でいえば東側丘陵に隣接した沖積低地に立地しており、北野集落の西背にある「丸山」の西、約50mの地点に所在する。丸山は現在、県道建設および宅地造成等によって、「仏山」（標高136.3m）から伸びる丘陵本体から分断され、独立丘陵状を呈している。しかし、本来は主稜線から分歧した一支脈の末端部分であったと推定される。

北野丸山遺跡周辺は、現状では平坦な水田となっている。調査の結果、丸山に近い部分（I区南端およびII区東端）では丘陵の基盤層と同じ固結度の強い黄褐色土が確認され、それを覆う黒味の強い暗灰褐色土からは縄文時代中期前半を中心とする遺物が多量に出土した。このことは、現地形では低平な沖積地の下に、丸山から伸びる丘陵の一端が埋没していることを如実に示しており、検出された包含層の最大深度は、II区では現田面から-1.9mにも達した。トレンチの幅が狭くこれ以上の深度については調査することができなかったが、同層は急激に落ち込みながら西に連続する。本遺跡は、国道116号バイパス建設に伴い調査された島崎『大武遺跡』（春日1998）などと同じく、丘陵埋没部に形成された遺跡の一つであり、縄文時代中期前半の古環境を考える上で注目される遺跡といえよう。

2. 歴史的環境

北野丸山遺跡からは、縄文時代中期前葉～中葉および、弥生時代中期後半から平安時代にかけての、実に多様な時期の遺物が出土している。最も遺物量が多いのは縄文時代の資料であり、古墳時代前期の資料がそれに次ぐ。以下では、主体をなす縄文時代を中心に周辺の遺跡について概観したい。

和島村周辺で最古の資料は、分水町『有馬崎遺跡』から出土した後期旧石器時代のナイフ型石器である（前山1997）。村内では、『八幡林遺跡』（和島村教育委員会1992）に同時代の石器が認められるが、極めて断片的である。

縄文時代草創期の資料は、前述した『有馬崎遺跡』から局部磨製石斧・石核などが少量出土しているのみである。続く縄文時代早期に属する遺跡は、現段階では確認されていない。

縄文時代前期になると、わずかに遺跡数が増加する。当該期前半に位置付けられるものとしては、和島村『大武遺跡』から比較的まとまった資料が出土しているほか、和島村『奈良崎遺跡』（春日・小池ほか2002）・『有馬崎遺跡』・寺泊町『五分一城跡』（岡本1991）などからも当該期の土器が検出されている。それに後続する前期後半の資料は断片的であり、『有馬崎遺跡』・寺泊町『横滝山廃寺跡』（寺村光晴ほか1977）などで少量の土器が出土している。

縄文時代中期になると、今回報告する『北野丸山遺跡』のほかに、村内では『城遺跡』・『一本松遺跡』・『十二遺跡』・『高畠場遺跡』・『八幡林遺跡』（以上、和島村1996）、隣接地域では寺泊町『大平遺跡』・『法崎遺

跡』(以上、寺泊町1991)『向屋敷遺跡』(八重樫2000)、与板町『岩方遺跡』などが当該期の遺跡として知られている。信濃川に面した『大平遺跡』『岩方遺跡』の規模が比較的大きいのに対し、島崎川流域の遺跡は、小規模のものがほとんどである。そのような中にあって、『北野丸山遺跡』は土偶・三角形土版といった信仰に関わる道具を持ち、石器組成・出土土器量からみても、当該期の島崎川流域では稀な、拠点集落のひとつであった可能性が高い。

縄文時代後期～晩期になると、島崎川流域では遺跡数が急増し、特に後期中葉以降にその傾向が顕著となる。代表的な遺跡としては、分水町『幕島遺跡』(上原1964)、寺泊町『京ヶ入遺跡』『横瀧山庵寺跡』『松葉遺跡』『山王B遺跡』(以上、寺泊町1991)、和島村『十二遺跡』があげられる。これらの遺跡は規模も大きく、香炉形土器・土偶・石剣・石棒・独鉛石・玉といった特殊遺物を多く伴うことから、いずれも中核的な集落であったと推定され、前段階までとは質的な面においても異なった遺跡のありかたを示す。

No	遺跡名	所在地	所属時期	文献	備考
1	有馬崎	西蒲原郡部分水町国上7569番地1	草創・前・中	前山1997	旧石器時代の資料も出土
2	幕島	〃 〃 幕島2574番地	後・晚	上原1964	
3	宝崎	〃 〃 蒲原 宝崎	中・後	上原1956	
4	京ヶ入	三島郡寺泊町京ヶ入 殿林	後・晚	寺村1953、寺泊町1991	
5	向屋敷	〃 〃 大地 向屋敷	中	八重樫2000	
6	法崎	〃 〃 戸崎 法崎	中・後・晚	寺泊町1991	
7	横瀧山庵寺	〃 〃 竹森 横瀧	前・中・後・晚	〃、寺村・久我1960	白鳳期の寺院跡と重複
8	松葉	〃 〃 下桐 松葉	後・晚	〃	
9	山王B	〃 〃 下桐 山王	後・晚	〃	
10	五分一船渠	〃 〃 五分一 船渠	中・晚	〃、戸根ほか1978	
11	五分一城跡	〃 〃 五分一 大谷別外	前	岡本1991	
12	大平	〃 〃 岩方 大平	中	寺泊町1991	
13	岩方	〃 与板町岩方 中沢	中・後		
14	大武	〃 和島村島崎 大武	前・中・後・晚	春日1998	
15	奈良崎	〃 和島村島崎 奈良崎	前・中・晚	春日ほか2002	
16	姥ヶ入	〃 和島村島崎 姥ヶ入	後・晚	小田2000	
17	八幡林	〃 和島村島崎・両高 八幡林	中	和島村教育委員会1992	旧石器時代の資料も出土
18	大船渠	〃 和島村北野 大船渠	中・後	和島村1996	
19	城	〃 和島村北野 城	中	〃	
20	下ノ西	〃 和島村小島谷 下ノ西	後	〃	旧村営プール地点
21	一本松	〃 和島村若野浦 東山	中	〃	
22	十二	〃 和島村小島谷 上ノ西	中・後・晚	〃、寺村1957	
23	高畠場	〃 和島村日野浦 イラバ	中	〃	

第2表 周辺の主要遺跡（縄文時代）一覧表



第2図 周辺の主要遺跡（縄文時代）分布図

第III章 発掘調査の概要

1. 遺跡の概要

『北野丸山遺跡』は從来、東側の独立丘陵部のみが『丸山館跡』として登録されていた。しかし、平成12年度に丘陵西側の水田部で確認調査を実施した結果、縄文～平安時代にかけての遺物・遺構が発見され、既登録の中世城館とは性格が異なることが明らかになった。それを受け、同時期の遺物の散布が認められる丘陵部を含め、縄文時代～平安時代の遺物散布地として新ためて遺跡登録したものである。

遺跡の現況は、丘陵部が畠地および山林となっており、頂部平坦面には方形の塚が2基所在する（丸山塚群）。当初から登録されていた館跡については、和島村史において「遺構が不鮮明であり、中世城館としての確証がない。……館と断定するにはさらに詳細な調査が必要である。」とされ（鳴海1996）、中世城館の有無については今後の検討課題となっている。遺物は主に畠地部分を中心に散布し、縄文土器・須恵器・土師器の細片や、剥片等が現在でも採集できる。

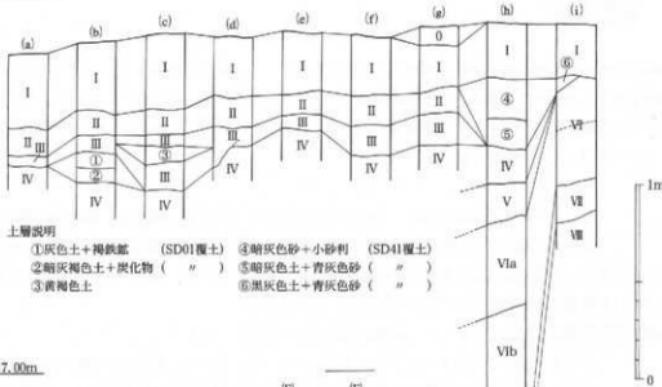
新たに遺跡の存在が確認された低地部は、水田・畠地および桐原集落排水処理場の敷地として利用されている。包含層が深いため、山際に近い一部を除き地表面では、ほとんど遺物の散布が認められない。このため、低地部における遺跡の広がりを捉えることは困難だが、北野住宅団地建設時に実施した試掘調査および、今回の県営圃場整備事業に伴う確認調査の成果からみて、東西100m×南北80mほどが遺跡範囲と推定される。

2. 基本層序

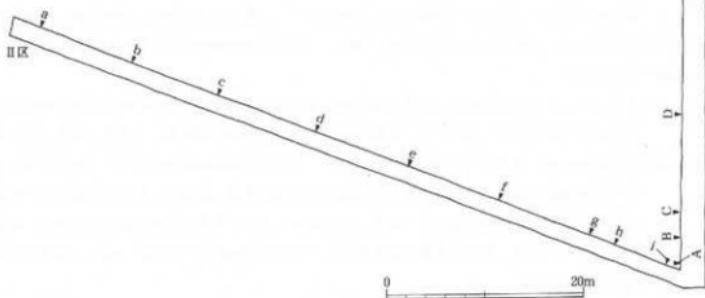
調査区付近の基本層序は、第3図に示した通りである。縄文時代の包含層であるVI層は、丘陵埋没部が確認された深掘区にのみ存在している。本層は、落ち口付近にあたるI点では単層だが、深くなるにつれ層厚を増し、色調にも明確な違いが現れて、VIa・VIbの2層に細分できる。以下では、各層の観察所見を記す。

- | | |
|--------|---------------------------------|
| I 層 | 暗褐色土（水田耕作土） |
| II 層 | 灰褐色土、褐鉄鉱の影響で赤く汚れる（水田床土） |
| III 層 | 黒褐色土、炭化物の小粒を含む（古墳時代～平安時代の遺物包含層） |
| IV 層 | 黄褐色土、本層上面で古墳時代以降の遺構が確認できる |
| V 層 | 灰白色土、II区の深掘部で確認 |
| VIa層 | 黒灰色土、炭化物粒を多量に含む（縄文時代の包含層上層） |
| VIb層 | 暗灰褐色土、炭化物粒を多量に含む（縄文時代の包含層下層） |
| VII 層 | 灰褐色土、非常に締まりがあり無遺物、I区では小礫を含む |
| VIII 層 | 黄褐色シルト、固結度が高く丘陵の基盤層と同一とみられる |

17.00m



17.00m



第3図 北野丸山遺跡基本層序柱状模式図

3. 遺構各説

今回の調査で検出された遺構は、溝15条・土坑2基・ピット多数などがある。ピットの中には明らかな柱痕跡を持つもののが存在するが、調査区の幅が狭いため掘立柱建物としてまとめるることはできなかった。このほかII区の深掘部では、縄文時代中期前葉～中葉段階の土器捨て場が確認でき注目された。以下では、主要な遺構について概要を述べる。

(1) 溝

SD01

II-7～8区で検出された、南西から北東方向に伸びる溝。規模は、幅3.1m・深さ20cmを測り、断面は浅い逆台形を呈する。覆土は2層に細分され、上層に高師小體（管状の褐鉄鉱）に富む灰白色土、下層に炭化物を多量に含む暗灰褐色土が堆積している。内部からは、古墳時代前期に位置付けられる多量の土器が出土している（図版5-32～46）。

本溝の所属時期は、共伴土器からみて古墳時代前期に位置付けられよう。

SD02

II-1～2区で検出された、南北方向に伸びる溝。規模は、幅1.5m・深さ11cmを測り、断面はU字形を呈する。覆土は炭化物を多量に含む暗灰褐色土の単層である。内部からは、8世紀末から9世紀前葉頃の須恵器瓶類（図版5-57）などが出土している。

SD05

II-3～4区で検出された、東西方向に伸びる溝。規模は、幅40cm・深さ8cm前後を測り、断面はU字形を呈する。覆土は炭化物を小量含む暗灰褐色土を基調とする。内部からは、ロクロ土器の細片が少量出土している。

SD07

II-5～6区で検出された、東西方向に伸びる溝。規模は、幅50cm・深さ5cm前後を測り、断面はU字形を呈する。覆土は炭化物を小量含む暗灰褐色土を基調とする。内部からは、須恵器瓶類の肩部片および、土器の破片が少量出土している。本溝は前述したSD02と並行して所在し、形状・規模・覆土などもほぼ同一である。

SD26

II-22～23区で検出された、北東から南西方向に伸びる溝。規模は、幅1.4m・深さ12cm前後を測り、断面はU字形を呈する。覆土は炭化物を小量含む暗灰褐色土である。本溝からの出土遺物はないが、主軸方向からみて古代の遺構と推定される。

SD34

I-19～21区で検出された、南北方向に伸びる溝。規模は、東側の肩が調査区外にあるため幅・最大深度は不明だが、全長約5mが調査された。覆土は、炭化物・黄褐色砂・黄褐色土を含む暗灰褐色土である。本溝からの出土遺物は、図版4-26の須恵器無台杯と、有台杯の細片があり、古代の遺構と推定される。

SD35

I-20～21区で検出された、東西方向の溝。規模は、幅50～90cm・深さ最大6cm前後を測るが、底面には若干の凹凸がある。本溝の覆土は、直交するSD34と同一であり、両者の切り合ひ関係は認められなかった。覆土からの出土遺物はないが、SD34とは同時に機能していた可能性が高い。

SD37

I-14～15区で検出された、北東から南西方向に伸びる溝。規模は、幅25cm・深さ4cm前後を測り、断面はU字形を呈する。覆土は、黄褐色土ブロックを含む暗灰褐色土である。本溝からの出土遺物は皆無であるが、古代の遺物を出土したII区SD02と主軸方向・覆土が一致し、両者は近接した時期のものと推定される。

SD38

I-15区で検出された、北東から南西方向に伸びる溝。規模は、幅25cm・深さ5cm前後を測り、断面はU字形を呈する。覆土は、並行して伸びるSD37と同一である。本溝からの出土遺

物は無いが、古代の遺構と推定される。

SD39 I - 12～13区で検出された、北東から南西方向に伸びる溝。規模は、幅90cm・深さ10cm前後を測り、断面はU字形を呈する。覆土は、並行するSD37・38と同一である。本溝からの出土遺物は無いが、古代の遺構と推定される。

SD40 I - 18区で検出された、北東から南西方向に伸びる溝。規模は、幅20～40cm・深さ8cm前後を測り、断面はU字形を呈する。主軸方向・覆土は、SD37・38・39と同一である。本溝からの出土遺物は無いが、古代の遺構と推定される。

SD41 I - 27・28区からII - 35・36・37区にかけて検出された、北東から南西方向に伸びる溝。幅2.4～3.0m・深さ50cm前後を測り、断面は中央が一段深くなる形状をとる。底面には、水流によって形成された梢円形のくぼみ（おう穴）が観察される。覆土は2層に細分でき、上層は暗灰色土と黒灰色土の混合土、下層は青灰色砂を多量に含む暗灰色土であった。本溝からは磨耗した縄文土器の細片が多く出土しており、溝底に露出した縄文時代の包含層がその供給源である。所属時期を明示するような遺物は出土していないが、杭・流木の生々しい保存状態からみて、かなり新しい時代の遺構と考えられる。

SD42 I - 25～26区で検出された、北東から南西方向に伸びる溝。規模は、幅1.8m・深さ30cm前後を測り、断面はU字形を呈する。覆土は、暗灰色砂・青灰色土ブロックを含む暗灰褐色土の単層である。本溝も縄文時代の包含層を切って構築されており、内部からは磨耗した縄文土器の細片が多く出土した。本溝もSD41と同様に、比較的新しい時代の遺構と考えられる。

(2) 土坑・その他

SK06 II - 4区で検出された土坑。南側がさらに調査区外に伸びるため全容は不明。調査できた部分での規模は、幅1.4m・深さ15cm前後を測る。壁の立ち上がりは東側が緩やかであり、底面は比較的平坦である。覆土は、炭化物を少量含む暗茶褐色土の单層。内部からは、図版5-56の土師器环（内面黒色処理）や土師器壺の細片などが出土した。本土坑の所属時期は、共伴遺物からみて古墳時代後期頃に位置付けられよう。

SK29 II - 26～27区で検出された梢円形の土坑。規模は、長軸1.3m・深さ28cm前後を測り、断面は逆台形を呈する。覆土は4層に分層され、炭化物を少量含む暗灰褐色土を基調とし、間に黒灰色土の薄層を挟む。内部からは、須恵器环と土師器（ロクロ土師器の無台輪を含む）の細片が少量出土しており、共伴遺物からみて平安時代に位置付けられる可能性が高い。

SX36 I - 17～18区で検出された不整形の落ち込み。東西の立ち上がりは、調査区の制約のため未確認である。土壠断面を記録した部分での規模は、幅1.8m・最大深度11cmを測る。北側の壁に沿って溝状の深い部分があるほか、底面は比較的平坦である。覆土は、黄褐色土ブロックを含む暗灰褐色土である。内部からは所属時期を示すような遺物は出土していない。SD40と一部重複するが、両者の切り合ひ関係は確認できなかった。

土器捨て場 II - 35～37区の深掘部で検出された、縄文時代中期前葉を中心とする遺物の廃棄場。埋没丘陵の北西斜面に形成されており、実質6m²の調査に過ぎなかつたが、コンテナ換算で30箱もの遺物が出土した。包含層の最深部は、現地面下1.9m以上にもおよぶが、木質遺物・骨などの遺存はみられなかつた。捨て場の広がりは比較的狭く、5mしか離れていないI区深掘部では、遺物量が激減する。本捨て場に対応する、集落の本体については未確認である。

4. 出土遺物

(1) 概 観

今回の調査では、I区・II区を通じコンテナ換算で35箱の遺物が出土している。時期別の内訳は、縄文時代中期の資料が30箱、弥生時代から平安時代にかけてのものが5箱である。

縄文時代中期の遺物は、II-35～37区の捨て場から出土したものがほとんどで、隣接するI区深堀部では、対応層(VI層)が確認されたにもかかわらず、ごく少量が出土しただけであった。内容的には、縄文時代中期前葉～中葉の多量の土器、土偶、三角形土版、土製耳飾、石鐵、打製石斧、磨製石斧、不定形石器、凹石など、様々な器種がみられた。

弥生時代中期後半の遺物出土区は、I-21～25区の狭い範囲に限定される。土器量も少なく、古代のもと混在し(III層中)、総数20点ほどが確認されたにすぎない。

古墳時代の遺物は、II区を中心に出土している。時期的には前期から後期にかけてのものがみられ、SD01出土の中部高地(あるいは北関東)系土器や、包含層(III層)出土のTK47～MT15に対比される須恵器蓋壺などは、注目される資料である。

古代の遺物は、出土量は少ないが調査区全域から発見されている。7世紀後半から9世紀後半までの時期幅が認められるが、中でも8世紀末から9世紀前葉頃に位置付けられる資料が主体をなす。

以下では、地区・時期別に個々の遺物の概要を述べるが、最も遺物量の多い縄文時代中期の資料については、独立した項③として取り上げた。

(2) I区出土土器

a. 弥生時代(図版4-1～10)

1～10はI-21～25区で検出されたもので、いずれも弥生時代中期後半に位置付けられる。系統的には、中部高地系(1～2・5～7)、北陸系(3)、東北系(8～10)に分類される。

1は頸部に腰状文がめぐり、体部は波状文帯を垂下直線文で区切る文様構成をとる。器面の風化が著しく、口縁端部の施文の有無は確認できなかった。

2は受け口状の口縁部を持つもので、外面には櫛歯状工具による「ハ」の字状の刺突文、端部にはLR縄文が施される。本資料は、器形・文様構成においては中部高地的だが、本来ならば沈線山形文となるべき口縁部模様帯が、北陸的な「ハ」の字状の櫛歯刺突文に置きかわっている点において、両系統の要素を持つ折衷的な土器といえよう。

5～6は同一個体とみられ、LR縄文施文後に山形の沈線が施される。他の弥生土器が、いずれも暗い色調を呈するのとは対照的に、赤みを帯びた明るい色調を持つ。

7は外面ハケ調整の後、やや崩れた櫛波状文が施されるものである。

3は北陸系櫛描文土器の壘口縁部である。端部の形状・整形技法からみて、松ノ脇遺跡(和島村1998)出土資料に並行する可能性が高い。

8～9は小破片のため文様構成等は不明だが、鋭い工具による細沈線が施された山草荷式系の土器である。8の沈線が一本描きであるのに対し、9は二本同時に施文されており沈線間隔も2mmと非常に狭い。

10は下向きの連弧文が施されたものである。沈線は深いが、前述した山草荷式系土器よりは太い工具により施文されている。

b. 古代 (図版4-11~31)

器種としては、須恵器壺蓋・有台壺・無台杯・瓶類・甕、土師器無台椀（ロクロ整形）・甕が確認されている。土師器については磨耗・細片化が著しく、図示することはできなかった。以下では器種別に概要を述べる。

坏 蓋 (11~13)

11は内面に返りを持ち、口径17.6cmを測る大型品。12~13は口縁端部が下方に折れるもので、12はボタン状のつまみが付く。所属時期は11が7世紀後半、12~13については8世紀末から9世紀前半頃に位置付けられよう。

有台壺 (14~23)

14は方形のしっかりとした高台を持ち、法量も非常におおぶりなものである。11の壺蓋に近い時期、あるいは返り消失直後の時期（8世紀初頭頃）に位置付けられよう。

15~21は最も出土量が多い、8世紀末から9世紀前葉頃を中心とする資料である。法量は口径12~13cm・器高4.0cm前後の小型のものが主体をなす。22は胎土から佐渡小泊窯跡の製品と推定され、前葉でも中葉に近い時に位置付けられよう。

23は金属器を模倣した俊挽の身である。外面に鋭い稜を持つが、小片のため口径を復元することはできなかった。

無台壺 (24~29)

全形をうかがえる資料が少なく詳細は不明だが、口径12cmをわずかにこえる法量のものと、13.5cm前後の比較的おおぶりのものがみられる。佐渡小泊窯跡の製品は含まない。所属時期は、8世紀末から9世紀前葉頃に位置付けられよう。なお、26はSD34に伴うものである。

瓶 類 (30~31)

30~31は瓶類の底部破片である。高台の形状からみて、30は8世紀末から9世紀前葉頃、31については9世紀後半頃に位置付けられよう。

(3) II区出土土器

a. 古墳時代 (図版5-32~51・55~56)

SD01出土土器 (32~46)

32~34・38は甕である。主体をなす在地系の土器には、口縁端部が面を持つもの（32~33）と、丸い単純なもの（34）とがあり、頸部の形状では、典型的な「コ」字状を呈するもの（33）と、「く」字状に折れるもの（32・34）の2タイプに分かれれる。38は中部高地の箱清水式あるいは北関東の樽式土器の系譜を引くものとみられ、頸部に柳描直線文（縦状文？）、その上下に小刻みな波状文が施されている。胎土は他の土器と明らかに異なり、他地域からの搬入品である可能性が高い。

35~37は甕。折り返し口縁を持つ広口甕（35）と、二重口縁甕（36~37）とがみられる。37の外面は赤彩されている。

39は小型の鉢。安定した広い底部と、わずかにくびれる頸部を持つ。

44は脚部および口縁端部を欠く高甕。わずかに稜を残す小さな甕底部と、内湾気味に長く伸びる口縁部を持つ。甕部内面には明瞭な段が観察される。

45~46は小型器台。45は端部に明確な面を持つ。46は「ハ」字状に開く脚部を持ち、透かし穴は2個1対のものが2方向に施される。

40~41は台付土器の脚部、42~43は壺・壺などの底部破片である。

SD01出土土器は古墳時代前期前半に位置付けられ、従来の越後の編年におけるとあてはめると、坂井・川村編年（坂井・川村1993）におけるII-3～IV期頃に対比されよう。

SK06および遺構外出土土器（47~51・55~56）

56がSK06出土、それ以外は遺構外出土資料である。

47~48は土師器高坏の坏部および脚部。いずれも前期前半に位置付けられ、48は坏部が有段鉢状を呈するタイプの可能性があろう。

49~51は須恵器の蓋坏。陶邑の編年（田辺1981）におけると、形態・法量からみて49はMTI5型式、50~51はTK47型式の時期にそれぞれ対比されよう。

55~56は内面が黒色処理された土師器の坏。前述した須恵器蓋坏に伴うものであろう。

b. 古代（図版5-52~54・57）

当該期の土器は、II区全域から散漫に出土している。出土量はI区よりも少なく、細片がほとんどのため図示できた固体は少ない。器種としては、須恵器有台坏・無台坏・瓶類・壺・土師器無台碗（ロクロ整形）等が確認されている。土師器については磨耗・細片化が著しく、図示することはできなかった。

52~53は無台坏、52の底部外面には、ヘラケズギが施されている。

54は有台坏。わずかに内端接地となる方形の高台は、底部のかなり外側に貼り付けられている。

57は瓶類の底部。高台の両端を欠損するが、内端接地で大きく外に踏み張る形状になると推定される。

(4) 繩文時代の遺物

a. 土器（図版6-58~図版13-238）

掲載資料は、すべてII区の捨て場付近で検出されたものである。これらは大雜把にみて、中期前葉と中葉の2時期のものに大別される。出土層位は、VIa層・VIb層の上下2層であるが、下層からも中葉の資料が出土するなど、層の上下ではきれいに分離できない。

中期前葉の土器（図版6-58~図版10-127・図版12-143~図版13-158）

捨て場出土土器の95%以上を占めるのが当該期の土器である。これらは系統などから、次のように分類できる。第1類=北陸系（新崎式系）、第2類=東北系（大木7b式系）、第3類=中部高地系、第4類=粗製土器、の4類である。

（第1類）

58~118は半隆起線文が特徴的な北陸系の土器である。

器種としては深鉢と浅鉢が確認されている。浅鉢については、図示した116~118を含め4個体が確認されているにすぎない。

深鉢のうち器形が明らかなものは、筒形（58~60・93）、キャリバー形（61・63~65・69・71~73・76~78・80・82~89・91~92）、口縁部が短く外に折れるもの（62・68）、の4タイプに大別される。キャリバー形の中には、口縁部が明確な「く」の字状を呈する84~89や、大波状口縁となる72~78・80・82といった特徴的な一群を含む。

深鉢の文様構成としては、口縁部と頸部に連続爪形文が施された横位の半隆起線がめぐり、口頭部間および体部に垂下する縦位の文様帶を持つものが主体を占めるが、78・81・88・90・92~93・95などのように、爪形文を欠落する個体も存在する。半隆起線文と爪形文以外の文様要素としては、口縁部の縦位平行

沈線（58）、狭義の蓮華文（60～64・68・87）、格子目文（68・76・111・113）、楔形刻目文（112）、文様内部の横位充填沈線（91）、陰刻手法による三叉文・鋸齒文等の幾何学的な文様（73・78・104）、瘤・ボタン状の粘土粒貼り付け（59・77・86～87）、などがみられる。

口縁部および頸部文様帶には、地文に繩文が施されるもの（58・65・77・79～80・82・92・94～95）と、それを持たないもの（59～64・66～76・78・81・83～91・93）とがあり、68・83などは、胸部を含め全く繩文を欠く資料である。

115は筒状の器形をとる大型の深鉢。木目状撚糸文を持つ唯一の資料であり、頸部には横位の半隆起線がめぐる。

116～118は北陸系の浅鉢。116は口縁部が「く」の字に内に折れるもので、外面には横位の沈線と、それを縦に区切る沈線を組み合わせた模様が施される。117は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に1条の沈線がめぐるほかは無文となる。118は底部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がるもの。口縁部には横位の半隆起線による長梢円形の文様帶を持ち、胸部には繩文が施されている。

（第2類）

119～123・126～127は東北系の土器である。器種は全て深鉢で、浅鉢はみられない。

119は上端部に突起が付く橋状の把手。120・122は、梢円形に区画された隆帶内部に交互刺突を施すもの。121は口縁部をめぐる2本の隆起線間に連続刺突文を施し、以下、沈線により垂下する文様が描かれる。123・126～127は撚糸の側面圧痕を持つもの。いずれも繩文を地文に持ち、器形は123が筒型、126は頭部が「く」の字にくびれ胴が張る形態、127はキャリバー形である。

（第3類）

128は中部高地系の深鉢。口縁部が内傾気味に立ち上がるキャリバー型の器形となる。口縁部には隆帶による梢円形の区画を持ち、それに沿って有節沈線・沈線・連続刺突文が横位に施されている。本資料は、胎土・色調が他の土器とは明らかに異なり、搬入品とみられる。

（第4類）

124～125・143～153は器面のほぼ前面に繩文が施された粗製の深鉢である。器形が明らかなものでは、口縁部が直立する円筒状のもの（143～144・152～153）と、キャリバー形を呈するもの（147～150）に大別される。多くの場合繩文のみの施文であるが、143～147のように、口縁部に沿って1～2条の沈線が巡るものや、端部に山形あるいは瘤状の突起を付加したもの（144？・146・148）、繩文施文後に垂下する結節繩文が施されるもの（124～125）も存在する。150は折り返し口縁を持ち、地文に撚糸文が使用されている例である。

繩文のみが施文されている個体については、続く中葉段階のものを含む可能性がある。しかし、前葉と中葉の土器量の差（前葉が95%以上）からみて、ほとんどが前葉段階に伴うものであろう。

154～158は底部破片であり、便宜的に本類に含めた。155の底面には網代、その他の資料にはスダレ状の圧痕が観察される。

中期中葉の土器（図版11～120～142）

中葉に位置付けられる資料は、図示したものがほとんど全てである。系統的には、第1類=越後系、第2類=東北系（大木8a式系）の2系統に大別される。

（第1類）

129～136は隆起線と沈線を併用し、器面全体に立体的な文様を描く越後系の土器である。129は口縁部に鶏冠状把手と鋸齒状突起を持つ火焔型土器。鶏冠状把手は低く、頸部のくびれも小さいことから、火焔

型土器の中では古い段階に属する。134は王冠型土器に似た大波状口縁を持つもので、頸部には重菱形状の直線と渦巻きとを連続する文様構成をとり、胸部は4単位の垂下する隆起線間を、重層する横位の梢円形文で充填している。本資料は、王冠型土器のような定型的な文様構成とはならず、隆帯上に「ハ」の字状の連続刺突文が施されるなど古い様相を持つ。135～136は発達した把手を持つ王冠型土器で、前述した129・134よりは新しく位置付けられる可能性が高い。

(第2類)

137～138・140～142は東北地方の大木8a式系の土器である。137は口縁部に穿孔された4単位の突起を持ち、指頭圧痕による波状の隆帯が横位に施される。138・140・142は粘土紐貼り付けによる細い隆帯で模様を描くもの。141は縄文地上に青竹管による横位の沈線で施文を行なっている。

139は青竹管による横位の平行沈線および梢円区画が描かれるもので、一条は有節沈線となる。技法的には東北あるいは北関東のそれと通ずるが、残存部位からは系統を決し難い資料である。

b. 土製品（図版13-159～161）

II区の捨て場から、耳飾・三角形土版・土偶が各1点出土している。所属時期は、共伴土器より中期前葉から中葉の時期幅が考えられるが、土器量からみて前葉の資料に伴った可能性が高い。

159は側面がくぼむ滑車形の耳飾。施文・赤彩等はされておらず、大きさは外径3.9cm・孔径1.1cm・厚さ1.7cmを測る。

160は一端を欠く三角形土版。縦断面は若干反り気味で、平面形は上辺がやくぼみ他の2辺が直線的な三角形状を呈する。表面には、各辺に沿う2条1組のヘラ描き沈線および、「ハ」の字状の刻線が施されている。大きさは、縦（残存長）3.8cm・横5.1cm・厚さ1.0cmを測る。

161は板状土偶の下半部である。胴部正面と側面には、沈線による文様が描かれる。本土偶の形態・文様構成は、長岡市山下遺跡出土資料（中村1966）と極めて良く一致している。残存部位の大きさは、縦（残存長）5.5cm・横5.1cm・厚さ（最大）2.7cmを測る。

c. 石器（図版28-162～図版29-195）

今回の調査で出土した石器は、石鏃3点・石錐1点・石匙1点・打製石斧4点・磨製石斧2点・楔形石器2点・不定形石器11点・磨石類11点・剥片10点・石核3点・擦り切り分割された蛇紋岩礫1点である。出土状況は、I区-14～24グリッドのIII層中で検出されたものと、II区-35～37グリッドのVI層中で検出されたものがある。前者は弥生時代から古代にかけての土器と混在して発見され、弥生時代中期後半の土器に伴った可能性も否定できないが、I区とII区とで使用石材に差なく、石錐の形態からみて縄文時代中期前葉～中葉（土器量からみて大半は前葉）に位置付けられる可能性が高い。

石鏃（162～164）

162～164は凹基無茎石鏃である。石材には、玉髓（162・164）、頁岩（163）を使用している。162は長さ4.1cmを測る長身のもので、側縁部には鋸歯状加工が顕著に施されている。164は剥離面の観察から、折損後に再加工を行ない、先端部を再生している可能性が高い。

石錐（165）

165は二等辺三角形状を呈する石錐。玉髓を石材とし、1面に原石面を残す。先端部には、稜線部を中心にも著しい磨耗が観察されるが、形態および調整加工の状況からみて、厚手の平基無茎石錐からの転用品である可能性もある。

石匙 (166)

166は太いつまみを持つ横型の石匙。玉髓製で、厚手の横長剥片を素材とする。正面の一部に原石面、裏面に広く主要剥離面を残す。調整は粗く、刃部は両面加工で作り出されている。

不定形石器 (167~177)

二次加工によって刃部が作り出されたものおよび、使用痕のある剥片を一括して取り上げる。使用石材は、頁岩 (167)・流紋岩 (168・171・173・177)、凝灰岩 (169~170)、ガラス質安山岩 (172・175~176)、チャート (174) である。刃部や調整の状況から 5 類に分類できる。

A類 いわゆるスクレーバー。連続したやや深い調整で、側縁あるいは端部に刃部を作り出したもの。168~169の 2 点が該当する。

B類 剥片の縁辺部に連続した微細剥離が観察されるもの。167・171・175が本類である。

C類 いわゆる鋸歯縁石器。おおぶりな剥離で刃部を作り出す172・176と、細かな剥離で小刻みな鋸歯状の刃部を作る177がある。

D類 いわゆる抉入石器。174は 2 個縁に急角度の調整でノッチ状の刃部を作り出したものである。

E類 剥片の縁辺部に不連続な微細剥離・磨耗が観察されるもの。170と173の 2 点。

楔形石器 (179~180)

179~180は両極に剥離痕が認められるもので、ビエスエスキュー・両極剥片・両極石器などと呼称される一群に属する。使用石材は玉髓 (179) と頁岩 (180) である。

磨製石斧 (181~182)

いずれも蛇紋岩を石材としており、181は小型磨製石斧、182は定角式磨製石斧の基部破片である。

打製石斧 (183~186)

厚手の剥片を素材とするもの (183~184) と、礫を素材とするもの (185~186) とがある。使用石材は黒色頁岩 (183)・細粒砂岩 (184・186)・石英斑岩 (185) である。

磨石頬 (187~194)

円窪あるいは偏平窪の表面に、磨痕・凹痕・敲打痕が観察されるもので、それらの使用痕は一つの石器間に複合して観察される場合が多い。使用石材は輝石安山岩 (187~189・192および、未掲載 2 点)・輝綠岩 (190)・流紋岩 (191・194)・砂岩 (193)・ホルンフェルス (未掲載 1 点) である。

砥石 (195)

195は砂岩を石材とする砥石。平坦な不定形窪の 1 面に、溝・線状の磨痕が多数観察される。

石核 (178)

178は凝灰岩を石材とする石核。打面転移は 2 回行なわれており、剥離作業が進みかなり小型化した段階の残核である。このほか未掲載資料として、硅質頁岩製のものが 2 点出土している。

剥片

最後に、出土した剥片 10 点の石材について記す。頁岩 1 点・硅質頁岩 1 点・ガラス質安山岩 4 点・流紋岩 4 点である。

第IV章　まとめ

1. 遺構について

今回の調査では、縄文時代の捨て場1ヶ所と、古墳時代から平安時代にかけての溝・土坑・ピットなど多数を検出したが、中でもII区東端に姿を現した縄文時代の捨て場が注目される。

この捨て場は、埋没丘陵の西側斜面に所在し、確認された包含層の最深部は現田面から-1.9mにも達する（深度を増し、さらに西に伸びる）。時期的には中期前葉から中葉にかけて遺物の廃棄が行なわれており、出土量からみて前葉を中心に形成されたものと考えられる。捨て場とセットになる居住域については、今回位置を確認できなかったが、隣接する独立丘陵『丸山』の北西側丘陵裾付近に展開していた可能性が高く、集落部分の究明が今後の課題といえよう。

2. 遺物について

出土遺物はコンテナ換算で35箱に達し、時期的には縄文時代中期前葉～中葉・弥生時代中期後葉・古墳時代前期から平安時代にかけてのものが出土している。これらのうち最も量が多いのは、総量の85%以上（30箱）を占める縄文時代中期の遺物である。当該期の資料（土器29箱・石器1箱）は大半がII区の捨て場で検出されたもので、前葉の時期を中心にはざむかに中葉に下る資料を含む。

当該期前後の良好な資料は、周辺地域では信濃川左岸に所在する三島町千石原遺跡（中村・竹田・小林1973）のほか、巻町大沢遺跡A地区・松郷屋遺跡（以上、前山1994）・豊原遺跡（小野1994・前山1991）など、角田山麓の遺跡からまとめて出土している。以下では、前述した大沢遺跡A地区など、『巻町史』に示された角田山麓の遺跡の年代観を基軸に、北野丸山出土土器群の位置付けを行いたい。

中期前葉の土器

本遺跡から出土した中期前葉土器群は、半隆起線が特徴的な北陸系土器が主体をなし、少量の東北系土器・中部高地系土器を伴う形で構成されている。

北陸系の土器では、図版9-115など中期前葉中段階（豊原遺跡VI群・大沢遺跡A地区II期）に遡る可能性がある資料をわずかに含むほかは、半隆起線上に連續施文された爪形文の盛行、4単位の大波状口縁、特徴的な口縁部が「く」の字に折れるキャリバー形深鉢（図版8-84～89）、狹義の蓮華文（図版6-60～62など）・楔形刻目文（図版9-112）の存在などからみて、中期前葉新段階（豊原遺跡VI群1期・大沢遺跡A地区IIIa～IIIb期）、北陸地方における新崎式期に位置付けられるものと推定される。これら前葉新段階の資料のうち、半隆起線上の爪型文が欠落した個体（図版7-78・図版8-88・93・95など）については、中葉への過渡的要素を持つものとして理解されよう。

東北系の土器については、口縁部に撫糸の側面圧痕（図版10-123・126～127）を持つものや、隆帯による梢円形区画内に交互刺突文を充填した資料（120・122）などが出土している。これらは、大木7b式に對比されるとみられるが、当該期の遺跡では定量伴う場合が多い同系の浅鉢は未確認である。

中部高地系の土器は、図版10-128に示した1個体のみが確認されている。口縁部に梢円区画を持ち、区画に沿って有節沈線などが施されており、いわゆる後沖式（寺内1995・1996）に系譜を引くものと考えら

れる。本資料は、胎土・焼成が他の土器とは明らかに異なり、搬入品である可能性が高い。

これら東北・中部高地系土器と、中期前葉新段階の北陸系土器との共伴関係については、下田村曲谷E遺跡（長澤展生・古谷雅彦・倉石広太2001）や、堀ノ内町清水上遺跡（寺崎裕助ほか1996）において確かめられており、本遺跡の出土状況も、それを補強するものといえよう。

中期中葉の土器

中期中葉の土器は、図示したものではほとんど全量である。系統的には越後系のものと、東北系のものとに分けられる。

越後系の土器には、隆帯上の「ハ」の字刻み・モチーフなどに古い様相を示すものが多く（図版11-131・134）、低く幅広な鶴冠状把手を持つ129も、火焰型土器の中では古いグループに属する。135～136は定型化した段階の王冠型土器と推定され、前述した資料よりはやや新しく位置付けられよう。

東北系の土器には、粘土紐貼り付けによって文様を描く138・140・142、口縁部に指頭圧痕による連鎖状隆帯を持つ137、縄文地上に背竹管で文様を描く141、の3タイプがある。いずれも断片的な資料であるため、詳細な位置付けは困難だが、大木8a式期に並行し、前述した越後系土器と共に位置付けられる。

引用・参考文献

- 上原甲子郎 1956 「弥彦角田山周辺古代文化遺跡概観——付遺跡地名表——」『弥彦・角田山周辺総合調査報告書』新潟県教育委員会
- 上原甲子郎 1964 「幕島遺跡」分水町教育委員会
- 岡本郁栄 1991 「五分一城跡発掘調査報告書」寺泊町教育委員会
- 小田由美子 2000 「姥ヶ入製鉄遺跡」『埋文新潟』No.29 財新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野 昭 1994 「豊原遺跡」『巻町史』資料編1考古 卷町
- 春日真実 1998 「大武遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成9年度』財新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実・小池義人ほか 2002 「奈良崎遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集 財新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「古墳出現前後における越後の土器様相——越後・会津・能登——」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』平成2年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書
- 高橋 保 1989 「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟考古学談話会会報』第4号 新潟考古学談話会
- 高橋 保ほか 1992 「五丁歩遺跡 十二木遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 新潟県教育委員会
- 寺内隆夫 1995 「浅間山山麓の縄文中期中葉の土器」『平成7年度長野県考古学会秋季大会発表資料』長野県考古学会
- 寺内隆夫 1996 「斜行沈線文を多用する土器群の研究」『長野県の考古学』財長野県埋蔵文化財センター
- 寺崎裕助ほか 1996 「清水上遺跡II」新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 財新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺泊町 1991 「寺泊町史」資料編1 原始・古代・中世
- 寺村光晴 1950 「夕日の長者——有史以前の島田村と伝説——」島田村史第一集 島田中学校

- 寺村光晴 1953『新潟県中越海岸地方における末期縄文式土器と弥生式土器の様相』孔版
- 寺村光晴 1957『三島郡十二遺跡A地点出土の土器』『越佐研究』第12集 新潟県人文研究会
- 寺村光晴・久我 勇 1960『寺泊乃おいたち 先史遺跡について』
- 寺村光晴ほか 1977『横滝山廃寺跡発掘調査概報——昭和51年度調査——』寺泊町教育委員会
- 戸根与八郎ほか 1978『五分一船場遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第14集 新潟県教育委員会
- 長岡市 1992『長岡市史』資料編1考古
- 長澤辰生・古谷雅彦・倉石広太 2001『下田村曲谷E遺跡発掘調査報告書』下田村教育委員会
- 中村孝三郎 1966『先史時代と長岡の遺跡』長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎・竹田祐司・小林達雄 1973『千石原』長岡市立科学博物館
- 鳴海忠夫 1996『和島村の塚』『和島村史』資料編I 自然・原始古代・中世・文化財 和島村
- 新潟県教育委員会 1980『昭和54年度 新潟県遺跡地図(付、史跡・名勝・天然記念物等所在地)』
- 藤田 刚・長谷川正 1996『和島村の地形・地質』『和島村史』資料編I 自然・原始古代・中世・文化財
- 前山精明 1991「巻町豈原遺跡VI群3類土器考」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 前山精明 1994「大沢遺跡A地区の調査」「松郷屋遺跡」「巻町史」資料編1考古 巷町
- 前山精明 1997『有馬崎遺跡』分水町教育委員会
- 八重樫由美子 2000『向屋敷遺跡』寺泊町教育委員会
- 和島村 1996『和島村史』資料編I 自然・原始古代・中世・文化財
- 和島村 1997『和島村史』通史編
- 和島村教育委員会 1992『八幡林遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第1集
- 和島村教育委員会 1998『松ノ脇遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第6集

遺物観察表(弥生土器・土器類・須恵器)

※ 1・胎土の表記、英=石英、長=長石、チ=チャート、海=海綿骨針、雲=雲母、赤=赤色粒子、白=白色粒子、黒=黒色粒子
2・土器の色調は、土色計(MINOLTA SPAD-503)を使用して計測した。

(弥生土器・土器類・須恵器)

No.	出土地点	遺物名・層位	種別	器種	口径	底径	断面	色調(外・内)	胎土	備考
1	1-21	田 層	弥生土器	壺	16.4		灰褐色・灰褐色	灰・長・チ	半地起平行縫織・半地起平行縫織	
2	1-24	"	"	"	14.1		灰褐色・にぶい黄褐色	"	半地起平行縫織・半地起平行縫織	
3	1-21	"	"	"	15.0		灰褐色・灰褐色	灰・長・海	北陸系	
4	"	"	"	"		7.0	黑褐色・灰褐色	灰・長・チ・海		
5	1-24	"	"	"			にぶい黒・に古い黒	灰・長・チ・海・赤	中部高地系・LR編文・山形状態	
6	1-21	"	壺	"			にぶい黒・に古い黒	"	5上縫一全体	
7	1-25	"	"	"			黑褐色・灰褐色	灰・長	中部高地系?・櫛目状紋	
8	1-21	"	壺	"			灰褐色・に古い黒	灰・長・チ	東北系・本格3輪沈	
9	1-24	"	"	"			にぶい黒褐色・に古い黒褐色	灰・長	"・二本同時施文組合	
10	"	"	"	"			黑褐色・灰褐色	灰・長・チ・海	"・ヘア引き下向き泡足弧文	
11	1-13	須恵器	片 壁	壺	17.6		黄褐色・灰褐色	やや密・白・黒少	天井部ヘラケズリ	
12	1	1~日崩	"	"	16.0		2.5 黃・灰白	密・白少		
13	"	"	"	"	14.2		オリーブ灰・灰	青・白少	天井部ヘラケズリ	
14	1-16	田 層	"	右台环		11.8	灰・に古い青	やや密・白		
15	1	1~日崩	"	"	13.6	8.4	4.0 灰白・灰白	青・白少・黒	底外へテ記号	
16	"	"	"	"	12.4	8.0	4.0 灰・灰	青・白・黒少・海		
17	"	"	"	"	12.4	8.0	4.0 黑褐色・灰褐色	やや密・白・黒少・海		
18	1-13	田 層	"	"	12.2	6.8	3.7 楕円・オリーブ灰	青・白少		
19	"	"	"	"		9.0	灰・オリーブ灰	青・白少		
20	1-21	"	"	"		10.2	灰・灰	青・白少		
21	1-23	"	"	"		8.8	"	やや粗・白・海		
22	1	1~日崩	"	"		8.4	3.2 オリーブ灰・オリーブ灰	青・白少		
23	1-18	"	"	縫 横			灰・陶器	"	断面セビア色	
24	1-16	"	"	無台环	13.6	9.6	3.4 灰白・灰褐色	青・英・白少	やや軟質	
25	1	1~日崩	"	"	12.2	8.8	3.3 灰白・灰	やや粗・白少・黒		
26	1	SD34	"	"		9.6	にぶい黒褐色・灰白	青・白少	やや軟質	
27	"	1~日崩	"	"		9.2	灰・灰	"		
28	1-18	"	"	"		8.2	灰褐色・灰褐色	青・白少	"	
29	1	1~日崩	"	"		8.5	灰・灰	青・白・海		
30	"	"	"	瓶 附		10.4	褐灰・褐灰	青・白少		
31	"	"	"	"		13.4	灰・陶器	やや密・白		
32	H SD01	土師器	壺	"	16.4		明赤褐色・に古い赤褐色	英・長・チ・海	(外)ハケ、(内)板ナデ	
33	"	"	"	"		15.7	に古い黒・に古い黒	英・長	風化のため調整不明	
34	"	"	"	"		13.9	に古い赤褐色・灰褐色	英・長・チ・海	"	
35	"	"	壺	"	21.0		に古い黒褐色・に古い赤褐色	"	外画面打背	
36	"	"	"	"		18.0	明赤褐色・に古い赤褐色	"	砂粒少・風化のため調整不明	
37	"	"	"	"			に古い黒・に古い赤褐色	英多・チ	外画面赤	
38	"	"	壺	"		8.4	暗赤褐色・暗赤褐色	英・長・藍多・赤	細ねじれ心臓、腰子状・縫合跡	
39	"	"	"	鉢		5.0	に古い黒・に古い黒	英・長・チ		
40	"	"	台付土器	"	10.2		に古い赤褐色・に古い赤褐色	"	(外)ハケ、(内)不明	
41	"	"	"	"		8.2	に古い黒・灰褐色	英・長・チ・海	(内)外ハケ	
42	"	"	"	"		4.0	灰褐色・黑褐色	英・長・海	風化のため調整不明	
43	"	"	"	"		5.8	に古い黒・灰褐色	英・長・チ・海	底部外面木脂痕	
44	"	"	高 壺	"			に古い黒・に古い赤褐色	"	(外)風化のため調整不明、(内)ミカキ	
45	"	"	"	器 台	9.6		に古い赤褐色・灰褐色	"		
46	"	"	"	"		10.0	に古い赤褐色・灰白	"	(外)ミガキ、(内)ハケ	
47	H-5	田 層	高 壺	"			橙・橙	英・長・チ・赤・海	風化のため調整不明	
48	H-14	"	"	"			に古い黒・に古い赤褐色	英・長・チ・海	(外)ハケ、(内)風化のため調整不明	
49	H	1~II層	須恵器	片 壁	14.4		褐褐色・灰褐色	やや密・白・黒少	(外)ハケ、(内)風化のため調整不明	
50	"	"	"	"			褐褐色・灰	青・白	やや軟質、天井部ヘラケズリ	
51	H-17	田 層	高 壺	片 身	11.6		褐褐色・褐褐色	"		
52	H	1~II層	ノ	無台环	11.4		灰・灰	"	底部外面ヘラケズリ	
53	"	"	"	"		8.6	"	やや密・白・黒少		
54	"	"	"	右台环		10.8	黄褐色・灰	やや密・白・海		
55	H-13	田 層	黑色土器	片 壁	15.6		に古い赤褐色・黑褐色	英・長	内面黑色處理	
56	H	SK06	"	"			灰褐色・黑褐色	英・長・チ・海	"	
57	"	SD02	須恵器	瓶 附			灰・陶成	やや密・白少		

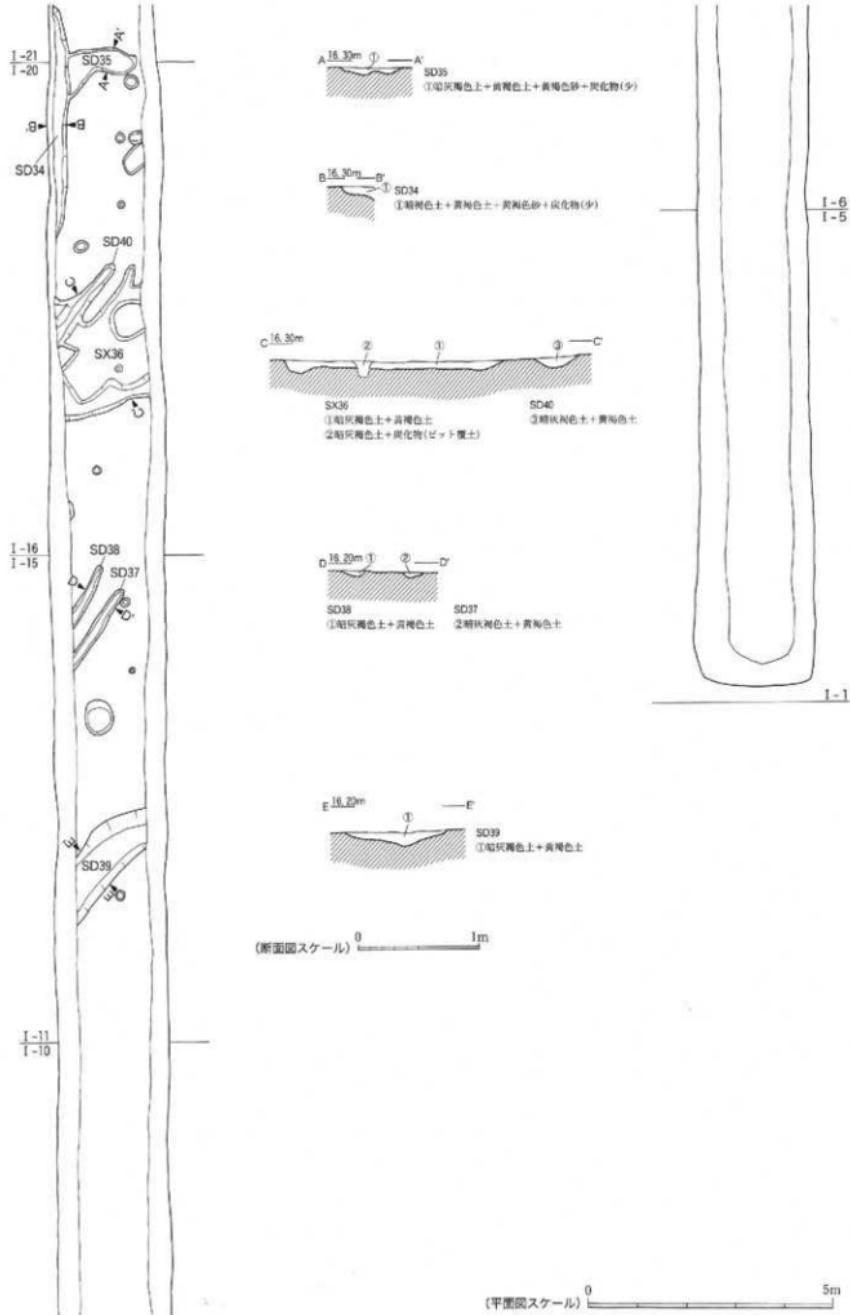
(縄文土器・土器品)

No.	出土地点	層 位	種 別	器種	口径	底径	断面	色調(外・内)	胎土	備 考
58	H-37	V1 層	縄文土器	深 茗	29.8		に古い赤褐色・に古い赤褐色	白・海	口縄型突起・複数平行縫織・半地起平行縫織	
59	H-36	"	"	"			灰褐色・に古い赤褐色	赤	複数平行縫織・半地起平行縫織	
60	"	"	"	"	18.0		灰褐色・に古い赤褐色	白	半地起平行縫織・爪形文・縫合文	
61	"	"	"	"			灰褐色・灰褐色	英・長・青少・白	半地起平行縫織・縫合文	
62	"	"	"	"			灰褐色・灰褐色	白少		
63	H-35	V1 b 層	"	"	36.6		に古い赤褐色・に古い赤褐色	英・長・チ	横筋平行縫織・爪形文・縫合文	
64	H-37	V1 層	"	"			"	"	小斜面・中斜面・直面・横筋平行縫織	
65	"	"	"	"			に古い赤褐色・に古い赤褐色	英・長・チ・白	半地起平行縫織・爪形文・地文	

No.	出土地点	層位	種別	第	幅	口徑	底径	深高	色調(外・内)	胎土	備考
66	II-37	V1 總	陶文土器	深	跡				黒褐・にぶい褐	英・長・手	半隆起平行線文+爪形文
67	II 不明		H						褐灰・にぶい褐	英・長	
68	II-35	V1a 級	H			10.4	5.6	8.4	にぶい赤褐・黒褐	白	特徴的款式+邊文式+側面起筋式+手目次
69	II-36	V1 級	H			10.0			にぶい赤褐・灰褐	英・露	半隆起平行線文+爪形文
70	II	H	H						褐灰・灰褐	英・長・露多	
71	II	H	H						灰褐・にぶい褐	英・露	
72	II-35	V1b 級	H			27.9			褐灰・にぶい褐	英・長・白	大腹狀口縁式+平跡起平行線文+爪形文+半隆起板垂下文+地文LR
73	II-36	V1 級	H						にぶい赤褐・黒褐	英・長・露	大型口縁式+側面起筋式+側面起筋式+手目次
74	II 不明		H						灰褐・にぶい赤褐	白赤少	大腹狀口縫式+半隆起平行線文+爪形文
75	II-36	V1 級	H						にぶい赤褐・にぶい褐	白	大腹狀口縫式+側面起筋式+手目次
76	II-37	H	H						灰褐・黒褐	英・長	山形山形口縫式+半隆起平行線文+爪形文+半隆起手目次
77	II-36	H	H						にぶい褐・にぶい褐	○	大腹狀口縫式+半隆起平行線文+爪形文+手目次+半隆起板垂下文+地文LR
78	II	H	H						にぶい赤褐・灰褐	英・長・露多	大型口縫式+側面起筋式+側面起筋式+手目次
79	II-37	H	H						にぶい褐・にぶい黄褐	英・長・手	山形山形口縫式+側面起筋式+手目次
80	II-36	H	H						灰褐・灰黃褐	白・赤	刀腳狀口縫式+側面起筋式+手目次
81	II	H	H						灰黃褐・灰黃褐	英・長・型	大腹狀口縫式+半隆起平行線文+爪形文
82	II	V1b 級	H			26.8			にぶい黄褐・灰褐	英・長・露・赤	大腹狀口縫式+半隆起平行線文+爪形文+爪形文+半隆起板垂下文
83	II	V1 級	H			23.0	11.8	19.6	にぶい赤褐・明赤褐	英・長・手	半隆起平行線文+半隆起板垂下文
84	II-37	H	H			25.2			褐灰・灰褐	英・長・露	小腹狀口縫式+半隆起平行線文+爪形文+半隆起手目次
85	II-36	V1b 級	H			22.5			にぶい黄褐・黒褐	英・長・手	山形山形口縫式+側面起筋式+手目次
86	II	H	H			23.0			にぶい黄褐・にぶい黃褐	○	半隆起平行線文+爪形文+半隆起
87	II	H	H			20.8			灰褐・灰黃褐	白	半隆起平行線文+邊文式+半隆起
88	II	H	H			17.6			灰褐・にぶい褐	長・露・海	種類区分區面式+ボタン式+貼付手目文
89	II	V1 級	H						にぶい褐・褐灰	白	小凹口縫式+側面起筋式+手目次
90	II	H	H						にぶい褐・灰黃褐	英長少	半隆起平行線文+側面起筋式+手目次
91	II	H	H						にぶい褐・灰黃	英・長・手	山形山形口縫式+側面起筋式+手目次+半隆起板垂下文+足底內側充份先燒
92	II	H	H						灰褐・にぶい黃褐	英・長・赤	半隆起平行線文+地文LR
93	II	V1b 級	H			17.0			にぶい黃褐・灰褐	白	山形山形口縫式+側面起筋式+手目次
94	II-35	V1 級	H						灰黃褐・灰褐	白・海	小凹口縫式+側面起筋式+手目次
95	II-36	V1b 級	H						灰黃褐・にぶい黃褐	英・長・露・赤少・赤多	半隆起平行線文+側面起筋式+手目次
96	II-35	H	H						灰褐・灰黃褐	英・長・手・露	半隆起平行線文+手目次+半隆起
97	II-37	V1 級	H						灰褐・にぶい褐	○	半隆起平行線文+手目次+半隆起
98	II-36	H	H						にぶい褐・褐	英・長・露	半隆起平行線文+地文LR
99	II	H	H						灰黃褐・にぶい黃褐	英少・白	
100	II	H	H						赤褐・灰褐	英・長・露	半隆起平行線文+半隆起板垂下文
101	II-37	V1 級	H						にぶい褐・にぶい褐	赤	半隆起平行線文+爪形文
102	II-36	H	H						灰褐・灰褐	英・長・露多	半隆起平行線文+手目次+半隆起
103	II-35	V1b 級	H						にぶい赤褐・にぶい褐	○	半隆起平行線文+手目次+半隆起
104	II-36	V1 級	H						にぶい赤褐・黒褐	赤・黑	半隆起平行線文+爪形文+三角形印記痕面+半隆起板垂下文
105	II-37	H	H						褐灰・にぶい褐	チ・赤	半隆起平行線文+半隆起板垂下文
106	II	H	H						灰黃褐・にぶい黃褐	英・長・露	半隆起平行線文+爪形文+半隆起
107	II-36	H	H						にぶい褐・にぶい黃褐	英・長・手・白・海	起筋面下文+灰化風化ため不明
108	II-37	H	H						にぶい褐・褐灰	白	半隆起平行線文+爪形文+半隆起板垂下文
109	II-36	H	H						にぶい褐・灰黃褐	白少	半隆起平行線文+爪形文
110	II	V1b 級	H						黃褐・黃灰	白・赤	半隆起平行線文+爪形文
111	II	V1 級	H						灰黃褐・灰黃褐	白少	半隆起平行線文+爪形文
112	II	H	H						にぶい黃褐・褐灰	白	半隆起板垂下文+凹面橫向條痕目
113	II-35	H	H						褐褐・灰黃褐	白少	半隆起板垂下文+格子目
114	II-36	H	H						黃褐・黃灰	露多	半隆起板垂下文
115	II-35-36	H	H						灰褐・灰黃褐	白	半隆起平行線文+地文式+半隆起板垂下文
116	II-35	V1a 級	H	浅	跡	36.6	10.4	13.0	にぶい黃褐・灰黃褐	英・長・手・白	口緣部半隆起平行線文+半隆起板垂下文+地文式
117	II-36	V1b 級	H			37.2	17.0	11.5	にぶい黃褐・にぶい褐	英・長	口緣部半隆起平行線文
118	II-37	V1 級	H			35.8	9.8	14.3	赤褐・黃褐	チ・白・海	口緣部半隆起平行線文+半隆起板垂下文+標記文
119	II-36	H	H						灰黃褐・灰黃褐	露多	口緣部半隆起板垂下文+標記文+地文LR
120	II	H	H						灰黃褐・にぶい黃褐	英・チ	口緣部半隆起板垂下文+側面起筋文+地文LR
121	II	H	H						黃褐・にぶい黃褐	○	口緣部半隆起平行線文+邊緣+邊緣圓弧紋+絞制痕+赤上げ燒成文+地文LR
122	II	H	H						灰黃褐・灰黃褐	英・長・露多	口緣部半隆起平行線文+地文式+地文LR
123	II	V1b 級	H						灰褐・にぶい褐	英・長・海	口緣部半隆起板垂下文+燒成文+地文LR
124	II-37	V1 級	H						褐褐・灰褐	英・長・手	燒成文+燒成板面文+地文LR
125	II	H	H						灰黃褐・灰黃褐	英・長	燒成文+燒成板面文+地文LR
126	II	H	H						にぶい黃褐・褐	○	燒成文+燒成板面文+燒成板面文+地文LR
127	II-36	H	H						にぶい黃褐・灰黃褐	チ・白	燒成文+燒成板面文+燒成板面文+地文LR
128	II-37	H	H						灰黃褐・にぶい黃褐	英・長・赤	燒成文+燒成板面文+燒成板面文+地文LR

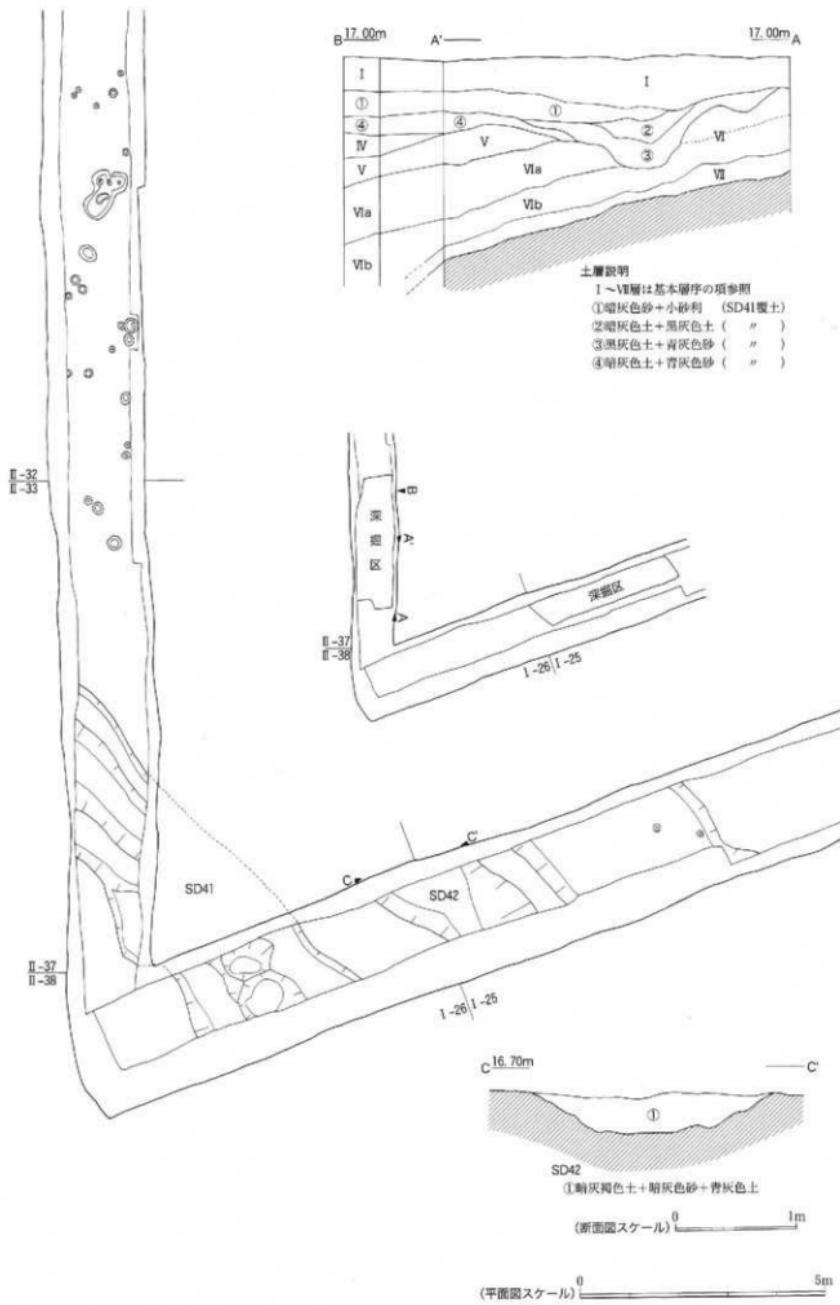
No.	出土地点	層位	種別	層 厚	口径	底径	器高	色調(外・内)	施 土	備 考
129	B-35	V1a層	縄文上層	深 跡	28.0			灰黄褐・灰褐	良・雲	口縁部周辺冠毛子・縫隙状突起・「X」字状把手・前伏陣上刻目・底下唇
130	B	V1 縄	"	"				灰黄褐・にぶい褐	英・長・常	斜位・低位帶
131	B-35	V1a層	"	"				灰黄褐・灰褐	英・長	縫隙状突起・底下唇
132	B-36	V1 縄	"	"				褐灰・灰褐	"	縫隙状突起
133	"	V1b層	"	"				褐灰・灰灰	英長多	重下唇
134	B-35	V1a層	"	"	27.8			にぶい赤褐・黒	英・長・雲	火照り斑・V字・縫隙状突起・縫隙・雲・手形把手・前伏陣上刻目・底下唇
135	"	V1 層	"	"				にぶい褐・にぶい褐	英・長・チ	王冠型土器・波瀾部内面彫・手
136	"	"	"	"				灰黄褐・灰褐	英・長・雲	丁字型・波瀬彫・縫隙状突起・底唇
137	"	V1a層	"	"	29.0			灰褐・にぶい褐	"	「縫隙」
138	B-36	V1 層	"	"	17.0			灰褐・灰褐	英・長・チ・雲・白	折り返し・底唇・把手・前伏陣上刻目・底唇
139	"	V1a層	"	"				にぶい褐・にぶい褐	英・長・彌少	側平式・把手凹・縫隙・雲・手形把手
140	B-37	V1 層	"	"				灰黄褐・灰褐	英・長	枯立網目付け波状彫刻・地文RL
141	B-35	V1b層	"	"				灰黄褐・灰褐	"	横位疣足紋・地文RL
142	B-36	V1 层	"	"				にぶい褐・灰褐	"	口縫部小孔等・把手付・把手凹
143	B-35	V1b層	"	"	24.2			灰黄褐・灰褐	白	口縫部部位平行地文RL
144	B-36	V1 层	"	"	26.6			にぶい褐褐・にぶい褐	白・赤	小波状・把手凹・地文RL
145	B-37	"	"	"				褐灰・にぶい褐	白	口縫部部位平行地文RL
146	B	"	"	"				灰黄褐・灰褐	白	口縫部小孔等・把手凹・地文RL
147	B-36	"	"	"				にぶい黄褐・にぶい黄褐	白	口縫部部位平行地文RL
148	B-35-36	"	"	"				灰黄褐・灰褐	白・赤	口縫部部位状突起・地文RL
149	B	"	"	"	26.0			にぶい黄褐・灰褐	チ・雲・白・赤	折り返し・口縫・地文RL
150	B-35	V1a層	"	"				にぶい褐・にぶい褐	白少	折り返し・口縫・地文Rの跡系文
151	"	V1 層	"	"				灰褐・にぶい褐	白	地文
152	B-36	"	"	"	27.8			灰褐褐・にぶい褐	英・長・チ・雲	地文RL
153	B-35	"	"	"	26.8			灰褐褐・にぶい褐	"	"
154	"	V1a層	"	"	10.8			灰褐褐・灰褐	"	底面シグマ状底板・地文RL
155	B-36	V1 層	"	"	10.6			崩灰褐・にぶい赤褐	赤	底面崩れ・把手
156	B-37	"	"	"	12.8			にぶい褐・にぶい褐	英・長・白	底面シグマ状底板
157	B-36	"	"	"				崩灰褐・にぶい褐	"	"・地文RL
158	B-35	V1a層	"	"	9.0			崩灰褐・灰褐	長・チ	"
159	B-36	V1 層	土剥耳環	外径3.5・孔径1.1・厚さ1.7	灰褐褐・灰褐	長・海		滑索形・側面くぼむ		
160	B-37	"	三角形土器	(3.8・幅3.1・厚3.1)	にぶい褐褐・にぶい褐	長・海		ヘラ縫き先端・"の字状切跡		
161	B-36	"	土偶	(腹5.3・腰5.1・厚32.7)	にぶい褐・にぶい褐	英・長		斜口土偶・手足・底より側面に底板		
(石 器)										
No.	出土地点	層位	種別	長 S	幅	厚 S	重 S	石 材	備 考	
162	E-35	V1a層	石 砕	4.2	1.3	0.4	1.8	玉髓(オリーブ黒色不透明)	四基無茎式・側縁部に顯著な側斜状加工	
163	E-36	V1 層	"	3.7	1.4	0.5	2.1	青石	"・片側面を欠損	
164	I-21	V1 層	"	2.8	1.5	0.5	2.5	玉髓(浅黄色不透明)	"・先端部折損後再加工・片側面を欠損	
165	I-14	"	石 鋸	2.8	1.8	0.9	4.1	リ(薄灰色)	先端部磨耗・厚手の四基無茎石を転用?	
166	I-19	"	石 鋸	3.5	4.6	1.1	17.0	リ(にぶい褐色半透明)	橢型石鋸・刃部両面加工	
167	I-24	"	不定形石鋸	3.8	2.8	0.5	4.2	真岩	刀鋸	
168	E-37	V1 層	"	5.2	4.9	1.3	25.6	透紋岩	A型	
169	E-36	"	"	6.2	4.0	1.5	32.2	麻灰岩	"	
170	E-37	"	"	6.0	4.5	1.3	30.4	"	E型	
171	I-17	"	"	4.4	5.5	1.1	23.2	夷奴岩	B型	
172	I	1～日層	"	4.3	5.0	0.7	12.6	ガラス質安山岩	C型	
173	B	V1 層	"	4.9	3.6	1.0	15.0	透紋岩	E型	
174	B-37	"	"	3.9	3.1	1.1	10.2	チャート	D型	
175	B-37	"	"	5.0	3.5	1.1	21.0	ガラス質安山岩	B型	
176	I-20	III 層	"	5.1	3.7	0.9	21.0	"	C型	
177	I-21	V1 層	不定形石鋸	9.9	7.5	2.1	127.5	麻灰岩	C型	
178	B-36	V1 層	石 核	3.6	4.5	1.9	33.6	麻灰岩	打面移は3回	
179	B-35	"	楔形石器	3.2	2.3	0.5	4.9	玉髓(灰色半透明)		
180	B-37	"	"	3.7	3.2	0.9	13.4	真岩		
181	B-36	"	網撲石斧	5.0	2.7	0.9	22.0	蛇紋岩	小型磨製石斧・刃部わずかに欠損	
182	I-20	III 層	"	4.5	4.5	1.7	39.6	"	定角式磨製石斧の頭部破片	
183	B-36	V1 層	打製石斧	11.4	6.6	2.6	199.8	黑色頁岩	片側素材・刃部および側面側縁部に磨耗	
184	B-35	"	"	9.8	4.3	2.0	94.5	藍砂岩砂岩	片側素材・裏面側縁部に磨耗・頭部少少	
185	B-36	"	"	7.3	6.9	2.6	161.5	石英岩砂岩	穂素材・頭部欠損	
186	"	"	"	8.4	5.0	2.2	128.0	藍砂岩砂岩	穂素材・刃部欠損	
187	B	I～日層	網石鋸	8.2	6.9	5.1	367.8	鷹岩安山岩	正鋸面にあたした状のくぼみ	
188	B-36	V1 層	"	5.6	7.9	4.0	300.0	"	正鋸面に側面削・一端につぶれ	
189	"	"	"	3.8	5.2	1.8	51.0	"	磨石類の小破片?	
190	B-35	V1a層	"	8.3	8.3	4.4	520.0	輝緑岩	正鋸面に複合した深いくぼみ・両縁縫に凸的なつぶれ	
191	"	"	"	12.0	8.5	3.4	550.5	透紋岩	正鋸面にあたした状のくぼみ	
192	B-36	V1 層	"	9.9	7.0	6.0	366.3	鷹岩安山岩	全体的に磨耗・被熱吸込み?	
193	"	"	"	10.3	7.9	4.0	356.5	砂岩	正鋸面に複合した深いくぼみ	
194	"	"	"	11.8	4.6	1.0	85.0	透紋岩	板状の長方形形溝を素材・一端に複数なつぶれ	
195	B-37	"	砾 石	8.6	7.0	2.5	299.0	砂岩	正面に渦あるいは穂の原頭	

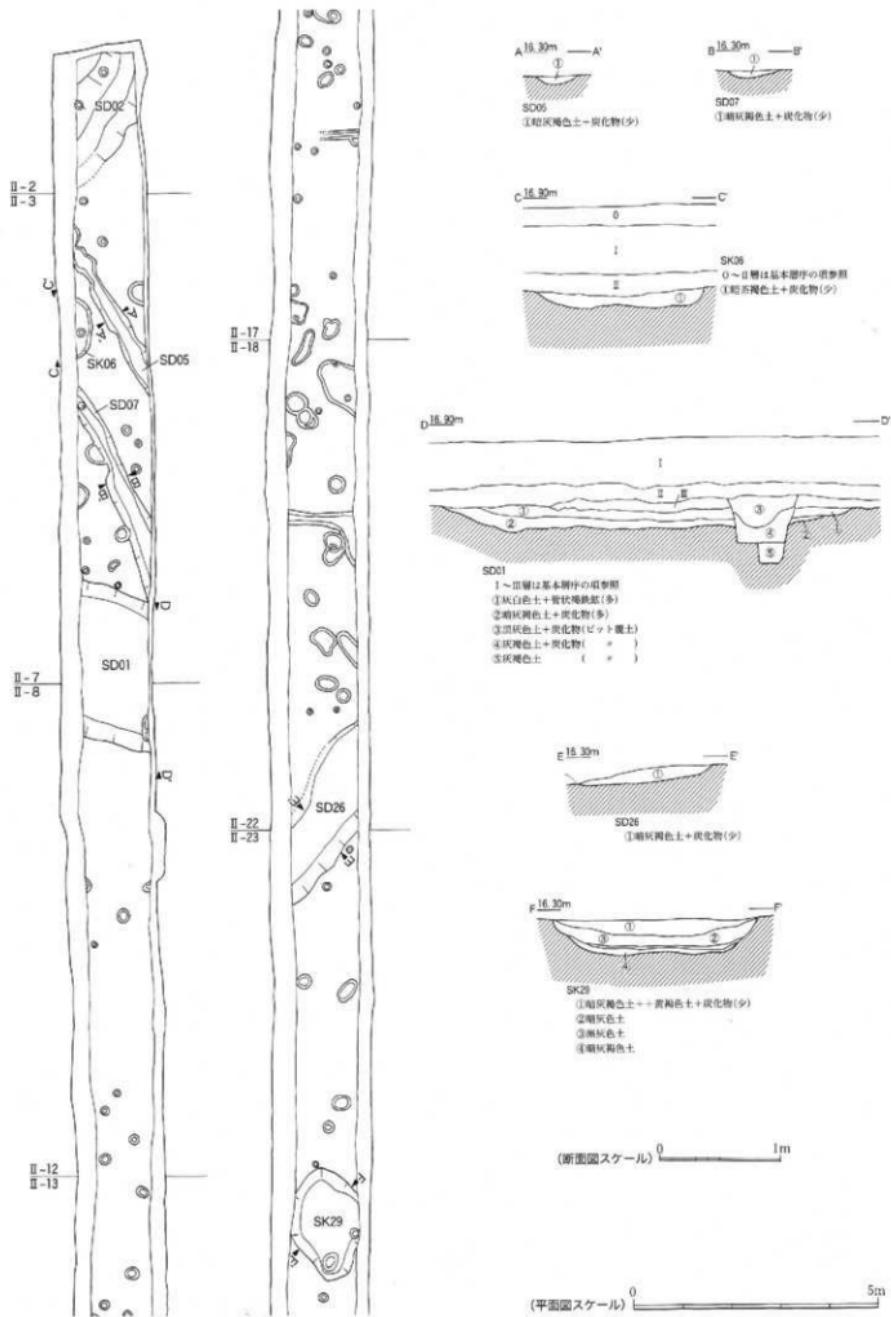
図 版

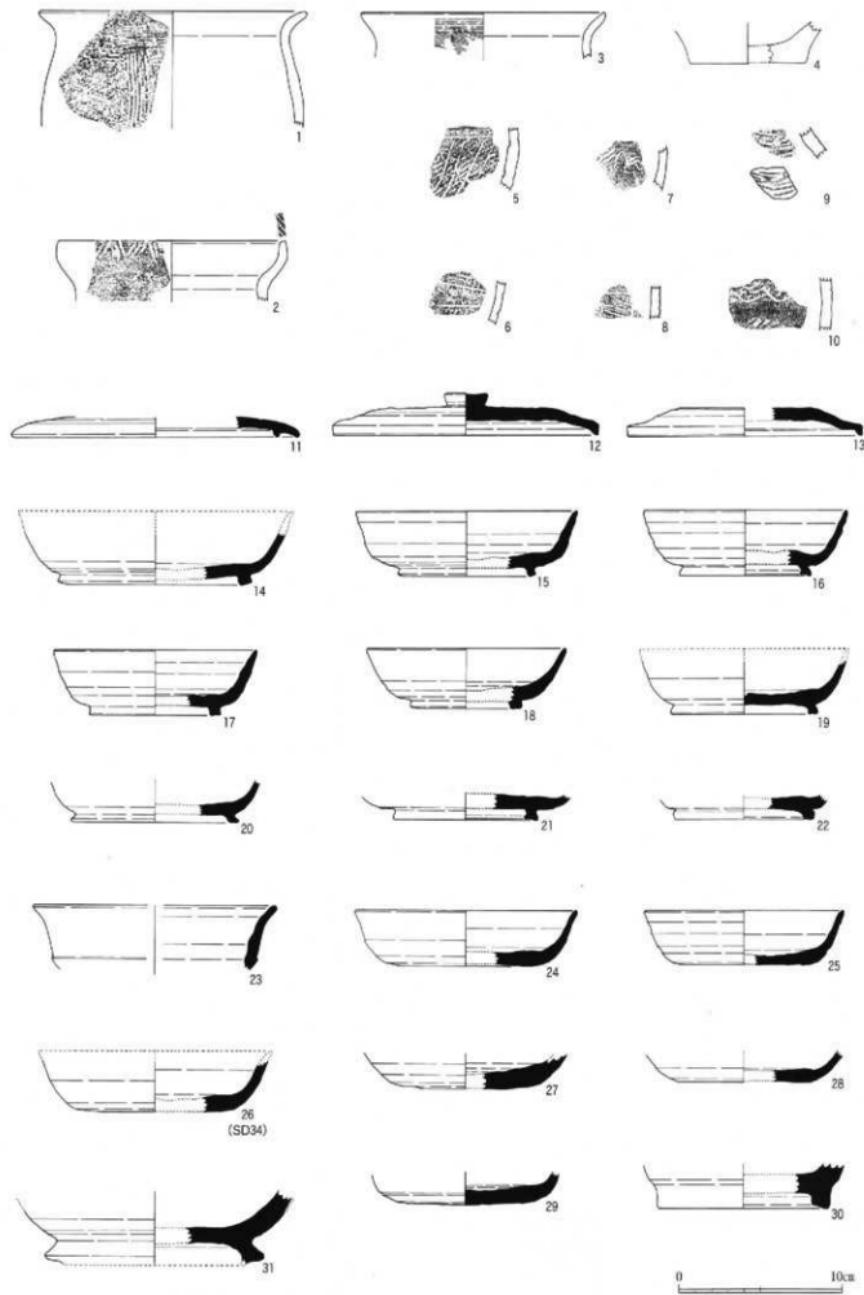


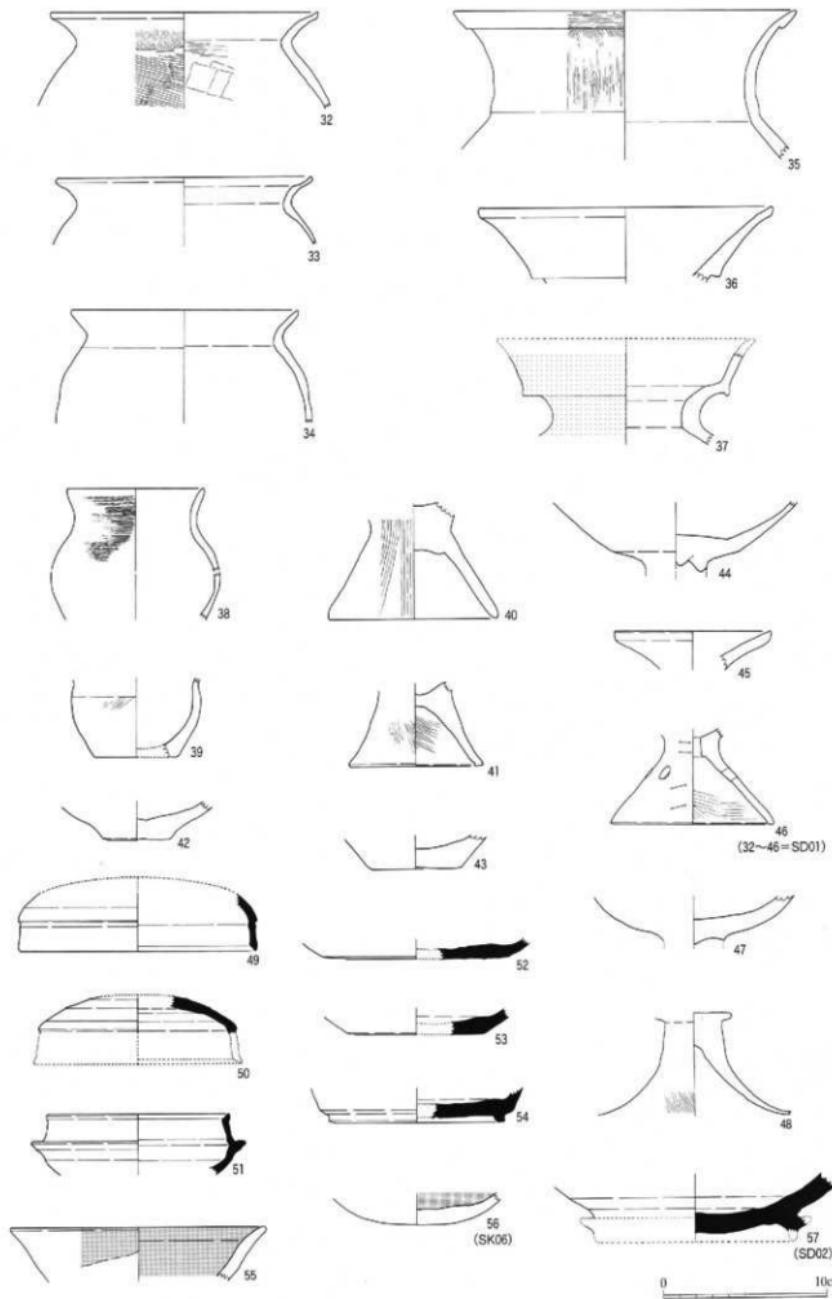
圖版2

I区・II区遺構平・断面図

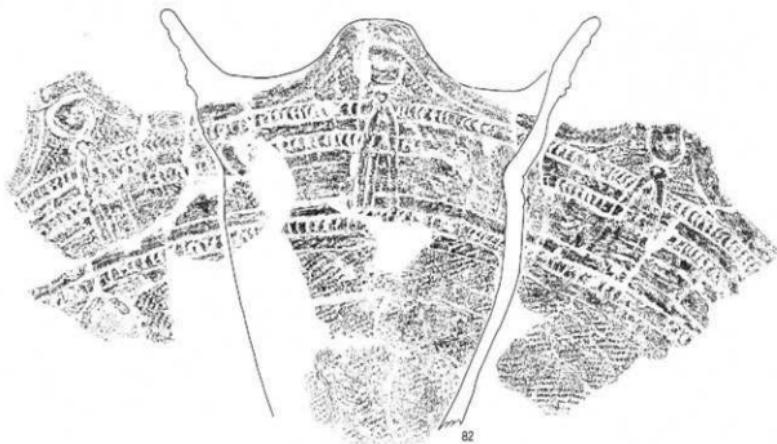
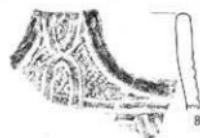
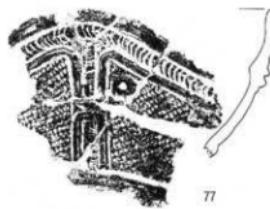
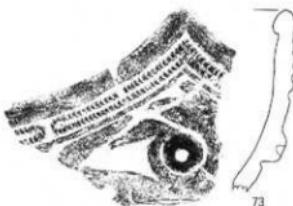
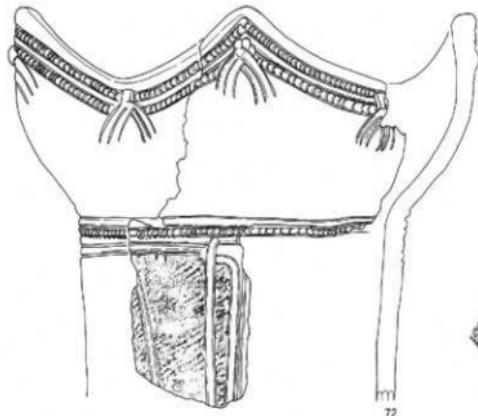




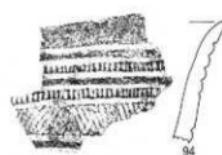
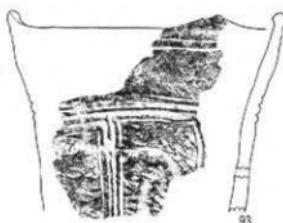
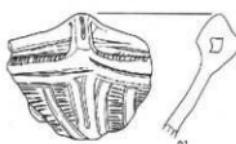
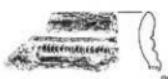
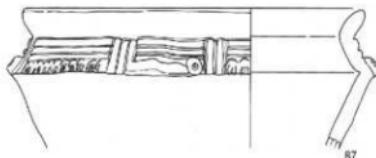
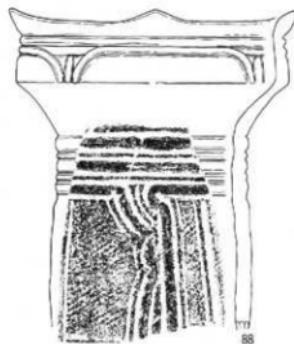
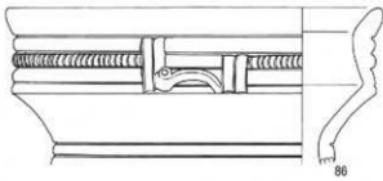
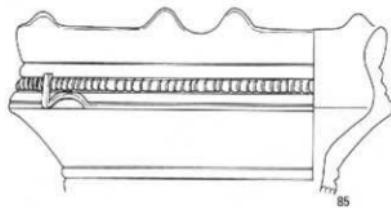
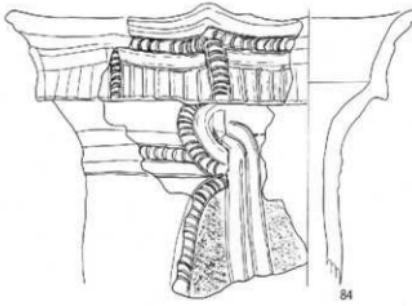
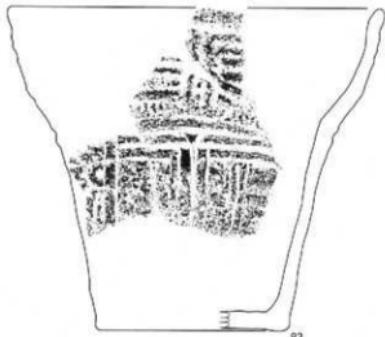




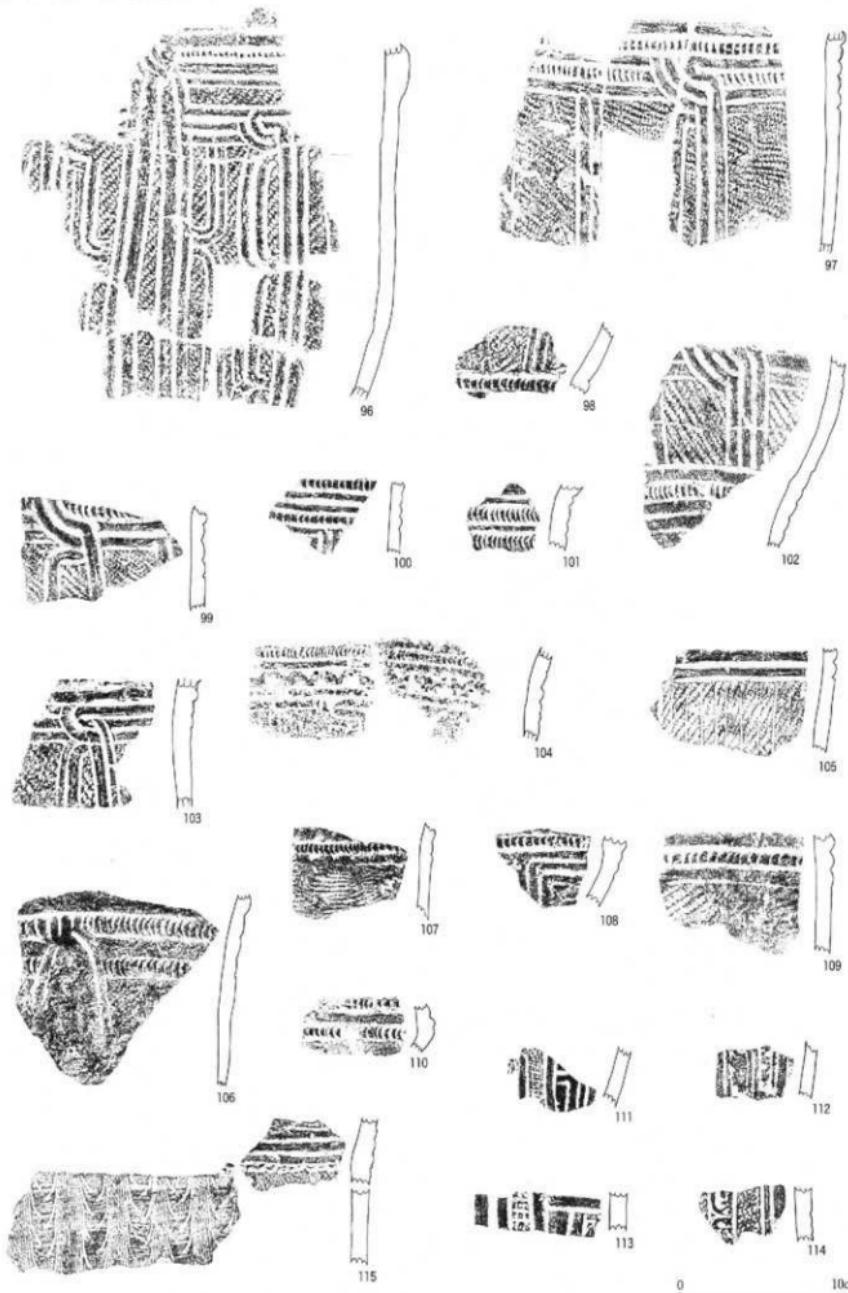




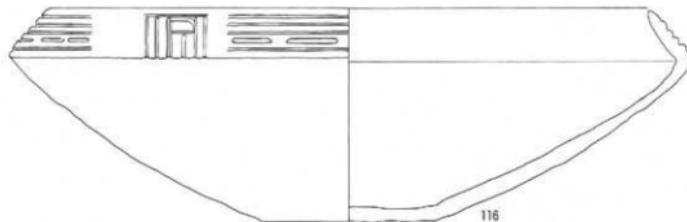
0 10cm



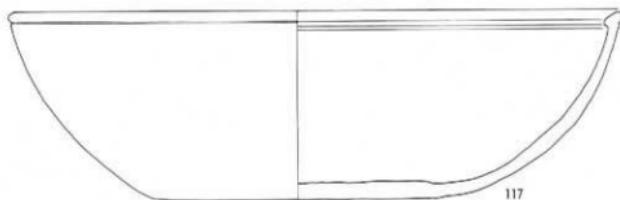
0 10cm



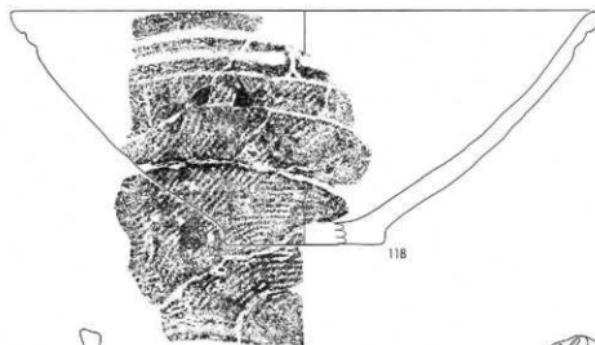
0 10cm



116



117



118



119



120



121



122



123



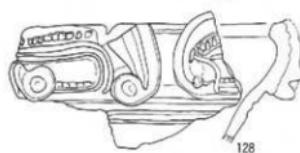
124



125



126

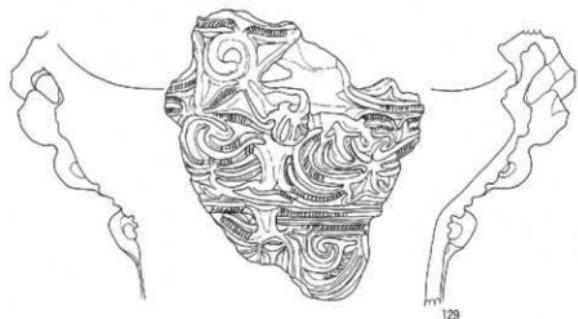


128



0

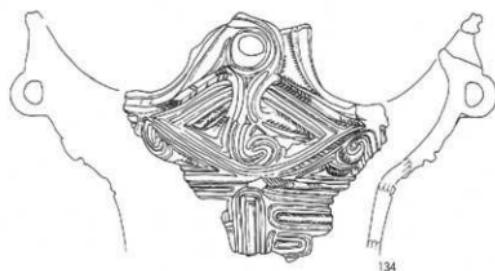
10cm



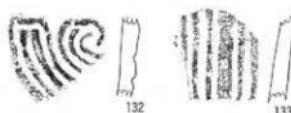
129



131

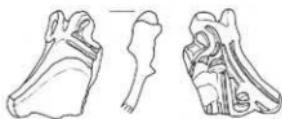


134



132

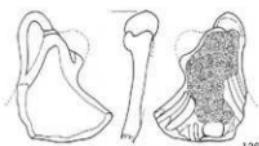
133



135



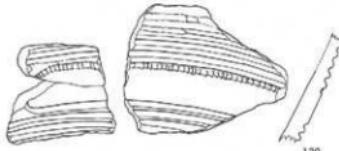
137



136



138



139



140



141



142

0 10cm



143



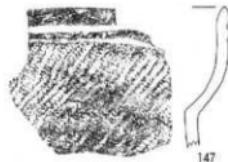
145



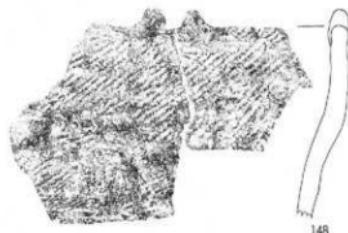
146



144



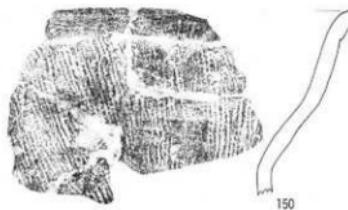
147



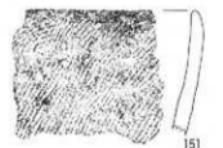
148



149

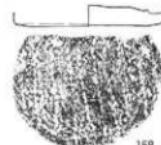
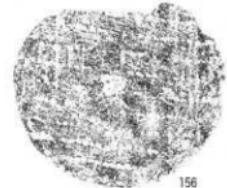
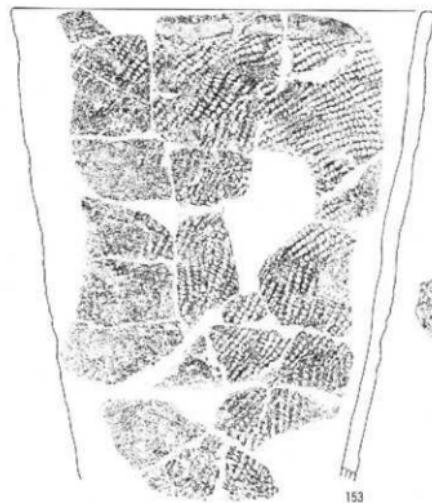
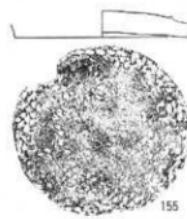
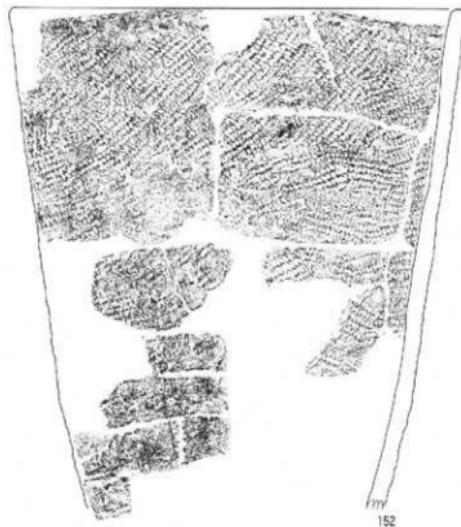


150



151

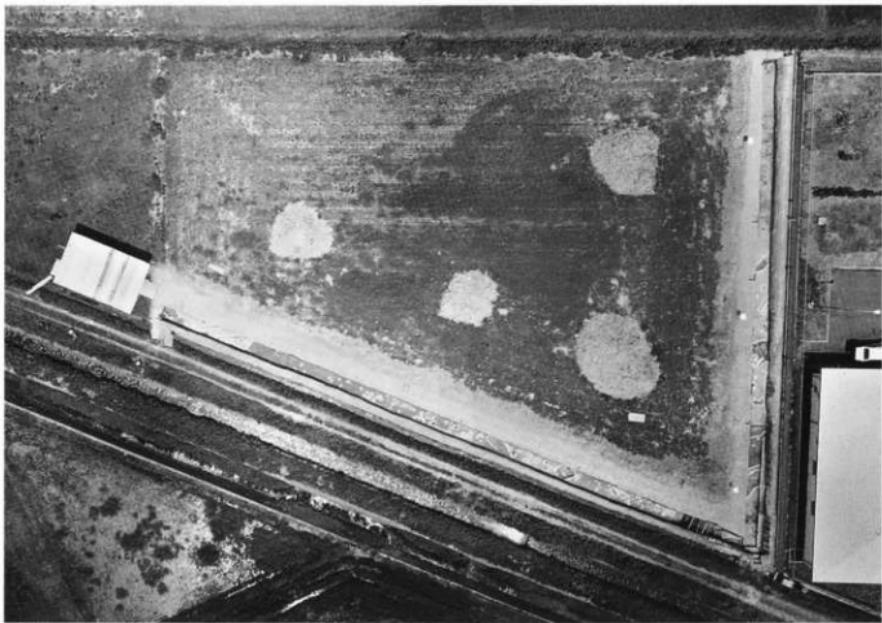
0 10cm



0 10cm



北野丸山遺跡遠景（東→西）



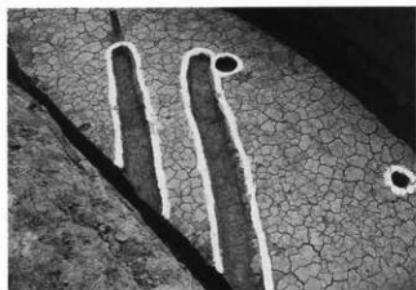
北野丸山遺跡完掘状況空中写真



調査前の状況（西→東）



I 区完掘状況（南→北）



SD37 SD38（南→北）



SD39（南→北）



SD34 SD35（北→南）



SX36 SD40（南→北）



SD41（南→北）



SD42（南→北）



調査風景



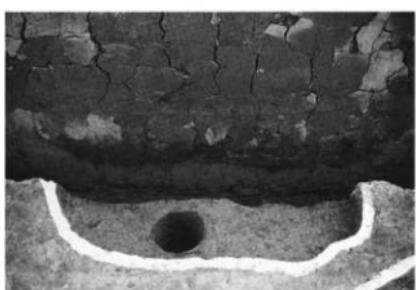
II区完掘状況（東→西）



SD02（東→西）



SD05 SD07（西→東）



SK06（東→西）



SD01土層断面（南→北）



SD01遺物出土状況（南→北）



SD01完掘状況（東→西）



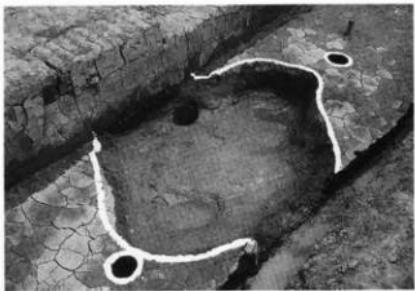
SD26土層断面（東→西）



SD26完掘状況（東→西）



SK29土層断面（南→北）



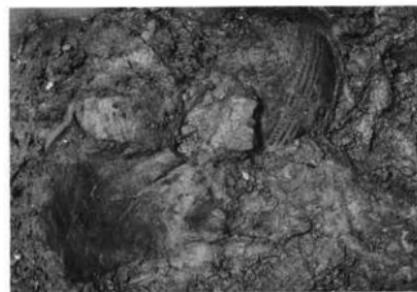
SK29完掘状況（南→北）



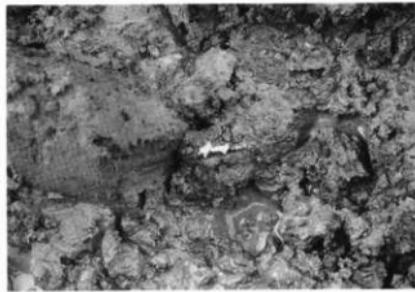
縄文時代捨場土層断面（南→北）



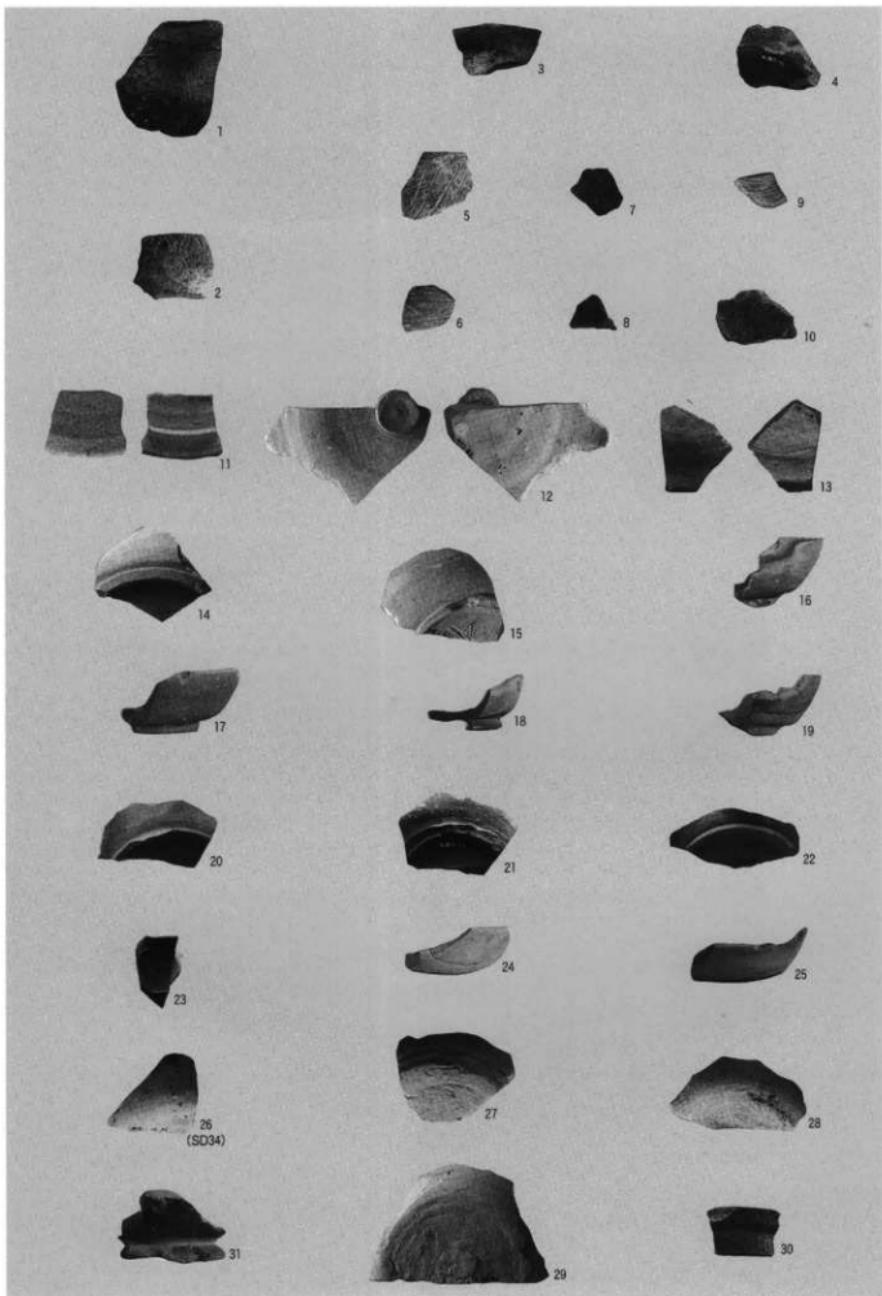
遺物出土状況（縄文土器・砥石）

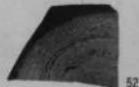
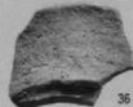


遺物出土状況（縄文土器）



遺物出土状況（石器）







58

61

62

68

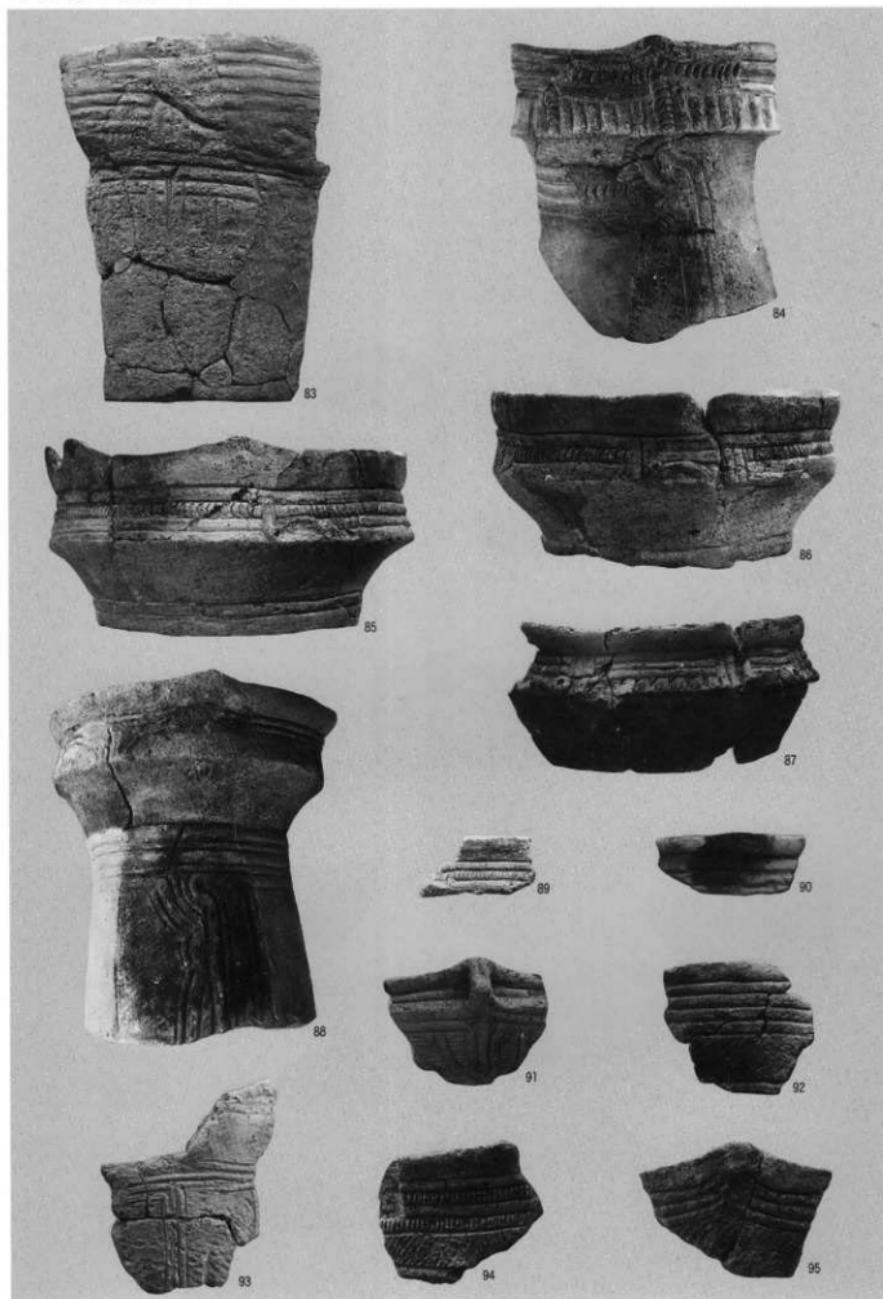
64

65

67

71







96



97



98



99



100



101



102



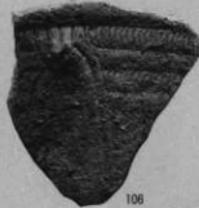
103



104



105



106



107



108



109



110



111



112



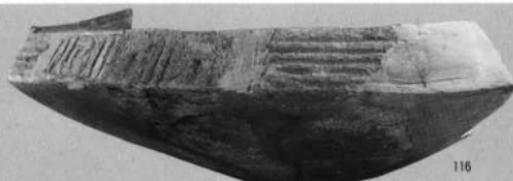
115



113



114



116



117



118



119



120



121



122



123



124



125



126



128



127



130



131



134



132



133



135



137



136



138



139



140



141



142



143



145



146



144



147



148



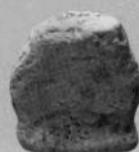
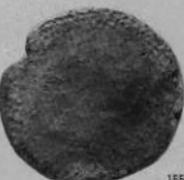
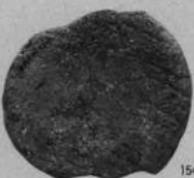
149

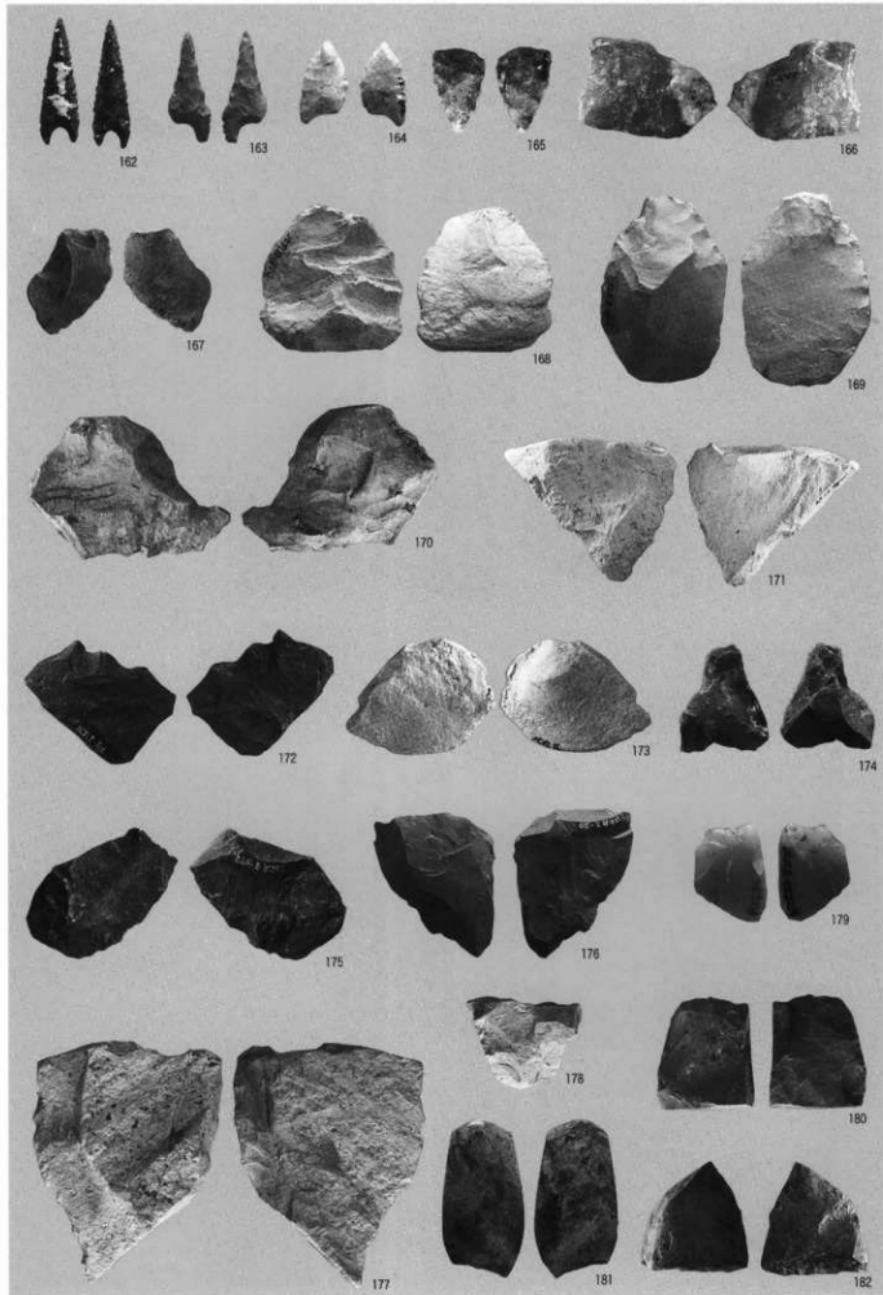


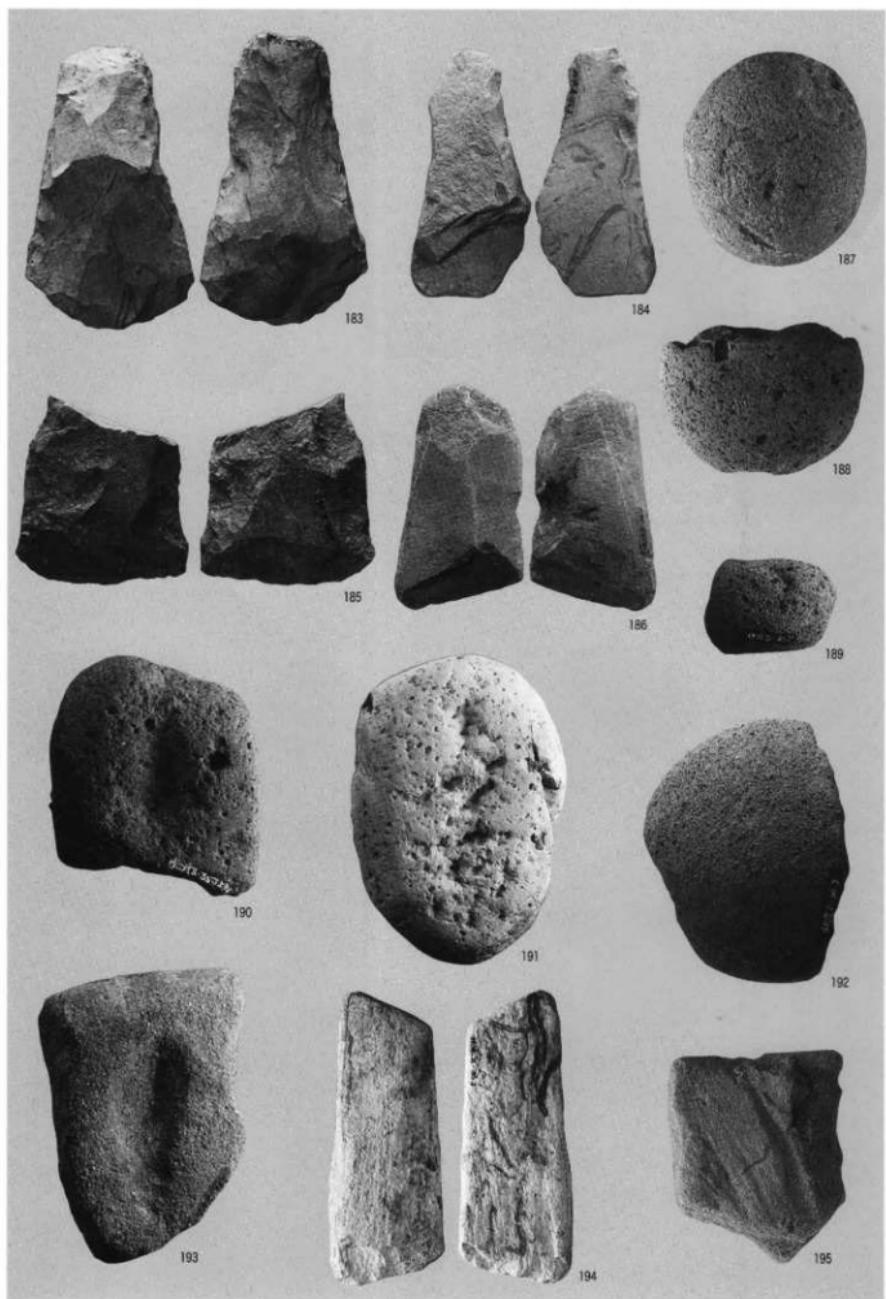
150



151







報告書抄録

ふりがな	きたのまるやまいせき							
書名	北野丸山遺跡							
シリーズ名	和島村埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	田中 靖							
編集機関	和島村教育委員会							
所在地	〒949-4511 新潟県三島郡和島村3434番地4 TEL 0258-74-3111							
発行年月日	2003年3月14日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
きたのまるやまいせき 北野丸山遺跡	新潟県三島郡和島村大字北野	市町村	遺跡番号	37° 34' 19"	138° 44' 09"	2001・6・5 ～ 2001・8・6	約150m ²	県営園場整備事業に伴う本発掘調査
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北野丸山遺跡	遺物 包含地	縄文中期・ 古墳・平安 時代	溝15条・土坑2基・ピット ト多数、縄文時代の捨て 場1ヶ所		縄文土器(中期)・石鏃・ 石錐・石匙・打製石斧・ 磨製石斧・磨石類・土 製耳飾・三角形土版・ 土偶・弥生土器・須恵 器・土師器		縄文時代中期前葉を中心 とする遺物の捨て場が検 出され、大量の土器・石 器等が出土した。	

和島村埋蔵文化財調査報告書第15集

北野丸山遺跡

平成15年3月6日印刷
平成15年3月14日発行

編集・刊行

新潟県和島村教育委員会
〒949-4511 和島村大字小島谷3434番地4
電話 0258-74-3111㈹
FAX 0258-74-3500

印刷・製本

㈱第一印刷所
新潟市和合町2丁目4番18号
電話 025-285-7161